# 4. 山 野 草



### ヒトリシズカ

- ●センリョウ科
- ●宿根草
- ●開花期 4~5月

### 〈性質〉

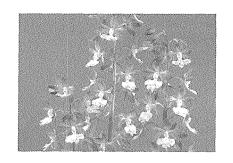
日本、朝鮮、中国(中北部~東北部)、樺太に分布し、疎林下など明るい半日陰を好みます。花弁は退化してなく、白色の花の主体は糸状に長く伸びた雄芯の葯隔(3本、長さ3~5 mm)で、両側の雄芯の外側に1個ずつ計2個の葯を付けます。花は展葉時に咲き出し、芽出し時から5月末まで楽しめます。葉は上部2節にまとまって付き、あたかも4枚の葉が輪生しているように見えます。茎は始め赤紫色で後に緑色となり、花後に伸びて高さ15~30cmになります。稀に始めから緑色のものがあってアオジクヒトリシズカ(青軸一人静)と言い、昭和天皇がお好みになりました。短く横走する根茎で殖え、1株から多数の茎を上げます。

### 〈裁 培〉

地植えの場合は、まず排水のよい半日陰地を選び、腐葉土を $20 \text{kg}/\text{m}^2$ 程すき込んで幅60 cmの畦を作り、 $5 \sim 7$  本立ちを1 株として分割した株を30 cm間隔に2 条植えします。鉢植えの用土は赤玉土、硬質鹿沼土の米粒大を混合したものでよく、5 本立ちで4 号浅鉢、7 本立ちで5 号浅鉢に植え込みます。まずは2 年間作り込んで芽数多く丈低くなるようにし、その後順次鉢を大きくしていきます。肥料を好みますので月2 回ハイポネックスの2,000倍液を与え、さらに春秋の2 回、芽を伸ばして欲しい部分に油粕と骨粉をねり合わせたものを5 g/株程置いてやります。丈夫な植物なので株分け移植はいつでもできます。

### 〈近縁種〉

フタリシズカ(二人静)は日本全土の低山に分布し、花は展葉後の5月に咲く遅咲きです。葉は上部2節に付きますが、節間が離れていて完全な対生です。花弁は退化してなく、白色の雄芯の花糸は合着して雌芯を包んで長さ2~4 mm、花穂に白色の花が点々とへばり付いているように見えます。茎は高さ30~60 cm、長くて丈夫なので茶花としてはヒトリシズカよりも実用的です。



# エビネ

- ●ラン科
- ●宿根草
- ●開花期 4~5月

### 〈種 類〉

園芸的に「エビネ」と言えば日本産の常緑で春の新葉展開時に花を付ける一群をさし、エビネ(ジエビネともいう)、キエビネ、キリシマエビネ、ニオイエビネ、サルメンエビネの5つの原種と、これらの自然交雑種であるタカネ(エビネ×キエビネ)、ヒゴ(キエビネ×キリシマエビネ)、イシヅチ(サルメンエビネ×エビネ)、コオズ(ニオイエビネ×エビネ)、スイショウラン(ニオイエビネ×キリシマエビネ)を総称します。

### 〈栽 培〉

### 〈近縁種〉

夏咲き温帯性の種類として、ナツエビネ、キソエビネ、キンセイランがあり、 冬は0℃でも大丈夫ですが、夏に暑がるので25℃以下に涼しくします。夏咲き亜 熱帯性の種類として、ダルマエビネ(ヒロハノカラン)、ツルラン、オナガエビネ、 リュウキュウエビネがあり、耐寒性がないので冬は5℃以上に保温します。熱帯 性のものは10℃以上を保つ必要があり、「カランセ」と称して洋蘭として扱います。



# チゴユリ

- ●ユリ科
- ●宿根草
- ●開花期 4~5月

### 〈性 質〉

日本、朝鮮、中国に分布し、山野の林下にごく普通に見かけます。地下に根と同形の細い根茎があり、匐枝を伸ばして殖えます。茎は高さ15~30cm、日本海側のものは大柄でよく枝分かれをします。花は茎頂に1~2個、横向き~下向きに付けて白色、ユリを小さくしたような形なのでチゴユリ(稚児百合)の名があります。

### 〈栽 培〉

丈夫な草で土質を選びませんが、水はけのよい所を好みます。若葉色の葉が観賞のポイントなので明るい半日陰を選びます。地植えとする場合は腐熟堆肥を  $10 \, \mathrm{kg/m}^2$ 程すき込み、幅 $60 \, \mathrm{cm}$ の平畦とし、 $1 \, \mathrm{芽}$ ずつに株分けして縦横ともに $10 \, \mathrm{cm}$  間隔に植え込みます。鉢植えの用土は赤玉土、ひゅうが土、硬質鹿沼土の米粒大を混合したものとし、 $3 \, \mathrm{号鉢}$ なら $1 \, \mathrm{芽}$ 、 $5 \, \mathrm{号浅鉢}$ なら $3 \, \mathrm{芽}$ を植え込みます。植えかえの時期は $11 \, \mathrm{J} \sim 4 \, \mathrm{J}$ の落葉時期です。単に殖やすだけなら毎年植えかえをして株を植え拡げていきますが、ボリューム感を出した観賞用鉢物としたい場合は  $2 \, \mathrm{年程植}$ えかえをしないで作り込みます。肥料は油粕と骨粉をねり合わせたものとし、花後と $9 \, \mathrm{J}$ に $1 \, \mathrm{芽}$ 当たり $3 \, \mathrm{g}$ ずつ与えます。病害虫は新葉展開時のアブラムシ、 $2 \, \mathrm{J}$ で、 $2 \, \mathrm{J}$ の根腐線虫の被害がありますので、ダイシストンとバイデートの粒剤を定期的に施用します。

### 〈近縁種〉

ホウチャクソウ(宝鐸草)は茎の高さ30~60cmと大きく、花は白色に緑を帯びます。キバナホウチャクソウ(黄花宝鐸)は茎の高さ40~80cmとさらに大きく、花は黄色で枝分かれをして沢山付けます。アマドコロ(甘野老)は茎の高さ30~80cm、葉腋ごとに $1\sim2$ 花を付けます。ナルコラン(鳴子蘭)やナルコユリ(鳴子百合)と誤称して切花葉物によく用いられるのはこのアマドコロの斑入品種でナルコユリは別種として存在し、茎に角稜がなく、葉が細く花は数花を下垂することで識別される。ユキザサ(雪笹)は高さ20~70cm、茎頂に円錐状に付く白色の小花が美しいものです。



### ウラシマソウ

- ●サトイモ科
- ●宿根草(球根植物)
- ●開花期 4~5月

### 〈性 質〉

立ち上がった偽茎の下端に球茎(球根のように見えるものが真の茎です。)を付ける球根植物で、平地~低山の野原、林縁、林下に生えます。夏草の伸長や樹木の新葉が展開することにより梅雨期以降は半日陰になります。自生地の土は腐植質が多い軽くて良質なものです。葉は1球に1枚ずつしか付けず、鳥足状に11~17の小葉があります。花弁のように見える仏炎苞は葉身より下に位置し、黒紫色をしています。花序の付属体は長くて仏炎苞の外に伸び出し、浦島太郎が釣糸を垂らした様に見立られてこの名があります。球茎(球根)の分球率が高く、開花球となればかなり多数の子球(ラミート)を付けて、1株のみで単生するということはありません。

### 〈栽 培〉

土がいつも湿っていて排水はよいという相反する条件を満たさないと栽培ができません。地植えとする場合は、半日陰の風通しのよい場所を選び、ピートモス  $20\ell/m$ をすき込んで幅60cmの平畦を作り、球茎(球根)の径が12mm以上のものを 親株とし、親球 1 個に子球が数個付いているという単位に分けて 1 株とし、縦横ともに30cm間隔に配置し、親株の大きさの 3 倍の深さに植え込みます。鉢植え用土は、赤玉土、ひゅうが土の米粒大と、ピートモスを混合したものとし、親球の大きさの 2 倍の深さに植え込みます。 5 号鉢で親球を  $1 \sim 3$  個、 7 号鉢で  $5 \sim 7$  個を植え込み数の目安とします。肥料は油粕と骨粉をねり合わせたものを用い、春の展葉後と 9 月の 2 回、親球 1 個に付き 5 g ずつ施します。葉は早落性なので、夏秋に水切れさせないように気を付けます。

### 〈近縁種〉

ユキモチソウ(雪餅草)、ヒメウラシマソウ(姫浦島草)、ムサシアブミ(武蔵鐙)、ニオイハンゲ(臭半夏)などが栽培されます。この仲間はテンナンショウ(天南星)と称する薬草ですが、茎に蛇紋があるために好まれず、園芸価値が高いものの栽培されることが少ないものです。



# ヒメシャガ

- ●アヤメ科
- 宿根草
- ●開花期 5~6月

### 〈性 質〉

北海道西南部~九州北部の山地の乾いた疎林下に生えます。北陸産(特に富山県西部のもの)は葉幅が太く花は丸弁で、関東産(特に秩父武甲山のもの)は葉幅が細く花は細弁です。花は径4cm程で淡紫色、花茎に2~3個付け、葉は淡緑色で長さ20~40cm、幅5~15mmで先が垂れ、冬は落葉します。

### 〈栽 培〉

地植えとする場合は腐棄土 $10\ell/m^2$ をすき込んで幅 $60\,\mathrm{cm}$ 、高さ $30\,\mathrm{cm}$ の平畦を作り、1株5~7芽に分けた苗を縦横ともに $20\,\mathrm{cm}$ の間隔とし、芽の先が土から顔を出す程度に浅植えします。鉢植えの用土は、赤玉土、硬質鹿沼土の米粒大~小豆粒大の混合とし、花後かまたは落葉後に、 $5\sim7$ 芽に分けた株を3号鉢に植え込みます。1年間作り込んで鉢に根が廻ったなら5号深鉢にゆるめ、さらに1年間作り込んで鉢内が根で一杯になったら、3年目の秋は根を土ごと1/3に切りつめて6号浅鉢に植え付けます。4年目の春は根切りのショックで一斉開花し、展示会出品にもってこいの姿となります。毎年秋の落葉後、枯葉を取り去り、浮き上がった芽を寒さから保護するために日土を入れますが、芽の先が土からちょっと顔を出すように薄くやります。目土の質は植え込み用土と同じものを用います。肥料は、花後と9月初めに油粕と骨粉をねり合わせたものを5g/株ずつ、さらに週1回ハイポネックス2,000倍液を潅水代わりに与えます。病害虫は何といっても白絹病が大敵で、予防的にコブ粉剤を芽出し時、梅雨期、秋雨期に散布します。排水が悪いとき、雨垂れ水が掛かるときに病気が発生し易いので雨の日に見廻って様子を見てやります。枯葉の除去も大切です。

### 〈近縁種〉

西日本のエヒメアヤメ(愛媛綾目)、中国北部のアンザンアヤメ(鞍山綾目)、朝鮮のキンカキツバタ(金杜若)、ヨーロッパ東部~ソ連西部のナンキンアヤメ(南京綾目)など小型のアヤメ類は同様の栽培法です。



# ミヤマオダマキ

- ●イトクリソウ
- ●キンポウゲ科
- ●宿根草
- ●開花期 5~6月

### 〈性 質〉

本州中部以北、北海道、南千島、樺太、朝鮮北部の高山草地に生えます。自生地は砂礫地で、日当たりと風通しがよく停滞水がない場所で雲や霧がよくかかって十分な水分が供給されています。花は紫色、萼片が大きく発達して距があり、5枚の花弁と5枚の萼片からなる花形が糸繰りの際に用いる糸巻き「苧環」に似ているのでこの名があります。草丈は10~30cmの小形です。

### 〈栽 培〉

地植えとする場合は、日当たりのよい場所を選び、庭土を50cm程堀り下げて排水用の有孔パイプを敷設し、径20mm程の栗石、割瓦、鉢カケなどを入れて20cm埋め戻し、その上にひゅうが土、硬質鹿沼土の大豆粒~米粒大のものを混合した用土を30cm厚に入れて植え床(この形式をスクリーベッドと称します。)を造ります。なお、排水パイプの末端は水が抜けるようにしておきます。株間を縦横ともに10cmとして植え付けますと即席のお花畑の出来上りです。鉢植え用土もひゅうが土、硬質鹿沼土の米粒大を混合したもので、3号鉢なら1芽、5号浅鉢なら3芽、7号浅鉢なら7芽を植え込みます。嫌地が起き易い植物なので種子が実れば必ず採り播きをして苗の交代維持に努めます。肥料はIB化成S1号がよく、葉のある期間中は月1回1芽に付き1粒ずつ与えます。

### 〈近縁種〉

ヤマオダマキ(山苧環)は日本、朝鮮、中国北部、シベリア東部に分布する大形の種類で、草丈は30~70cm、茶花に好まれます。南方型のキバナヤマオダマキ(黄花山苧環)は花が淡黄色、北方型のエゾヤマオダマキ(蝦夷山苧環)は花が帯紫褐色です。

ルリオダマキ (瑠璃苧環) は朝鮮北部の冠帽峰、白頭山などに分布し、草丈は30cm程、花が上品な青紫色をしているので好まれ、戦前に導入されたものが今も植え継がれています。



### シライトソウ

- ●ユリ科
- ●宿根草
- ●開花期 5~6月

#### 〈種 類〉

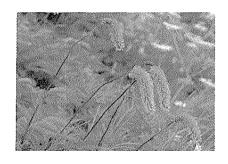
シライトソウは本州(秋田県以南)~九州、朝鮮南部に分布しますが、地域差がはなはだしく、北陸のものは大柄で根生葉の長さ12~20cm、花茎の高さ30~70cm、花被片は長さ12~15mmです。屋久島のチャボシライトソウ(矮鶏白糸草)は極小型で根生葉の長さ2~6cm、花茎の高さ12~20cm、花被片は9~12mmです。関東地方にはアズマシライトソウ(吾妻白糸草)、岐阜県にはミノシライトソウ(美濃白糸草)、静岡~愛知の県境にはミカワシライトソウ(三河白糸草)、佐賀県にはクロカミシライトソウ(黒髪白糸草)といった変種があり、草姿が微妙に異なります。北陸産の大型種は茶花に用いるために地植え、屋久島産は小鉢によるミニ仕立てという具合に観賞上の都合で使い分けをします。

### 〈栽 培〉

地植えとする場合は腐熟堆肥を10kg/㎡程すき込んで幅60cmの平畦とし、縦横ともに20cmの間隔に植え付けます。疎植にすると分株するばかりで花が付かないので、葉がふれ合う程の密植とします。鉢植えの用土は赤玉土、ひゅうが土、硬質鹿沼土の混合したものでよく、根出葉の径の倍の間口の鉢に植え込みます。産地により株の大きさが違うので株の大きさを見て鉢サイズを決めます。水が好きなので乾燥させないようにこまめに潅水します。特に地植えの株、鉢植えの株では小鉢や浅鉢のものの水切れに注意します。施肥はマグアンプKの大粒を月1回3粒/株程ずつ与えます。

### 〈近縁種〉

ショウジョウバカマ(猩々袴)も根生葉を付けてよく似ていますが、花は濃紫紅 ~淡紅~白色で4~5月咲きです。同様に地域差が大きく、北陸産は大型、太平 洋側のものは中型、南関東~四国に点々と分布するシロバナショウジョウバカマ (白花猩々袴)、九州のツクシショウジョウバカマ(筑紫猩々袴)は小型です。栽培 方法はシライトソウに準じます。



# カライトソウ

- ●バラ科
- ●宿根草
- ●開花期 6~10月

### 〈性 質〉

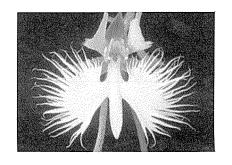
本州中部の日本海側の高山〜亜高山の高茎草原に特産し、特に白山、大日岳、白馬岳に多く自生する多雪地特有の植物です。変種のコウライカライトソウ(高麗唐糸草)が朝鮮の長白山、白頭山などに分布して対応しています。吹き溜り、雪崩道などの湿った高茎草原に生え、水切れと停滞水は大敵で常に新しい水を欲しがります。根茎は太く、長さ30〜60㎝の葉を根生し、高さ40〜80㎝の茎を立て、長さ4〜10㎝の淡紅色の花穂を付けます。昔中国から輸入していた絹糸の房に花穂の美しさをなぞらえて唐糸草の名があります。

### 〈栽 培〉

地植えは造成用の赤土か田畑の黒土がよく酸性のままとして石灰施用は禁物です。 $10\,\mathrm{kg/m^2}$ の腐熟堆肥をすき込んで植え床を作り、縦横ともに $30\,\mathrm{cm}$ の間隔に植え付けます。鉢植えの用土は赤玉土、硬質鹿沼土を混合したものとし、小苗なら5号鉢、中苗なら7号鉢、大株ならば尺鉢を用います。根株の太さが $5\,\mathrm{mm}$ で長さ $10\,\mathrm{cm}$ 以上あれば開花株ですが、大株である程花数が多いので小割りにしない方が無難です。肥料を好みますので春秋に各々 $10\,\mathrm{g}$ /株の油粕と骨粉をねり合わせたものを与えます。梅雨頃に葉の表面が白くなって株を弱らせるウドンコ病が発生するので、モレスタン水和剤を散布して防除します。

### 〈近縁種〉

ワレモコウ (吾亦紅、吾木香) の花穂は長さ  $1 \sim 2.5 \text{cm}$  で暗紅色ですが、枝分かれして多数付けます。ナガボノシロワレモコウ (長穂乃白吾亦紅) の花穂は長さ  $2 \sim 7 \text{ cm}$  で名の通りの色の花を付けます。この仲間は草丈があるので切花に適し、逸話に因んだ茶花、形を活かす現代挿花などに好まれます。



# サギソウ

- ●ラン科
- ●宿根草(球根植物)
- ●開花期 7~8月

### 〈性 質〉

前年の走出枝の先に楕円形の球茎を付ける球根植物で、日本(本州~九州)、台湾、朝鮮、中国、東シベリアの低地の湿原に分布します。各国ともに低湿地を開拓して農地を開発しているため、自生地はどんどん少なくなってきています。草丈は15~40cm、3~5枚の葉があって、1~5個の白色で径3cm程の白鷺が羽根を拡げた形の美しい花を咲かせます。

### 〈栽 培〉

湿原の植物で日当たりを好みますが、高温を嫌うため風通しをよくします。水分を好むが、水やりは早朝とし昼の高温時にはやらず、腰水は禁物です。乾くようなら日没後涼しくなってから水を補います。鉢栽培とし、地植えはしません。用土は水苔単用、または硬質鹿沼土の米粒大にピートモスを混合したものとし、3号鉢なら3球、5号鉢なら10球を植え付けます。肥料はハイポネックスの1,000倍液を週1回潅水代りに与えます。植えかえは2~3月に行い、葉腐病予防のためにベンレートTの白濁液(200~500倍液)に30分間浸漬して消毒します。

#### 〈同様の管理をするもの〉

トキソウ(朱鷺草)は横走する地下茎により増殖し、淡紫紅色(朱鷺色)の花を付けます。サワラン(沢蘭)はアサヒラン(旭蘭)とも言い、緑色の偽球(バルブ)により越冬し、鮮紫紅色の花を付けます。タイリントキソウ(大輪朱鷺草)はタイワントキソウ(台湾朱鷺草)とも言い、紫褐色~紫色の偽球により越冬しますが、5℃以上に保温する必要があります。ハクサンチドリ(白山千鳥)は紡鐘形の球茎(球根)で越冬し、紅紫色の小花を穂状に付け美しいもので、プラスチック製の4号深鉢に植え付けると調子よく出来ます。湿地性のランは水を好むため、乾き易い素焼き鉢は不向きで、水分がこもりぎみとなるプラスチック鉢とか釉薬のかかった鉢の方が栽培が楽です。



# オミナエシ

- ●アワツブバナ
- ●オミナエシ科
- ●宿根草
- ●開花期 7~10月

### 〈性 質〉

日本、朝鮮、中国、シベリア東部の日当たりのよい草地に生える「秋の七草」の一つです。茎は高さ60~100cm、多数の黄色の小花を平らな集散花序に付け、これを栗飯(あわめし)即ち女飯(おんなめし)に例えてオミナエシの名が出たと言われています。地下茎が横走して新株を作り、今年花を付けた芽は枯れてしまいます。新株の栄養葉は全縁ですが、開花芽の葉は羽状に深裂します。

### 〈栽 培〉

草姿が大きいので地植えに適します。耕地整理をする前は畔草として生えていた所もある程で湿地でも育ちますが、溜り水は苦手なので転換田に作付けする場合は幅60cm、高さ30cmの畦を作り、株間20cmの2条植えとします。鉢植えの用土は、赤玉土、鹿沼土など手近かにあるものでかまいません。鉢の大きさは4号鉢なら1株、6号鉢なら3株を植込みます。肥料は春の芽出し時、7月の梅雨明け、第1回採花後に各々10g/株の油粕と骨粉をねり合わせたものを与えます。植えかえは2年毎(1年おき)に行ない、こまめに株分けをして嫌地や株絶えをさせないようにします。花を長く咲き続けさせるため、咲き揃った枝を次々に切り取って切花などに用い、種を成らさないように気をつけます。

### 〈近縁種〉

ハクサンオミナエシ (白山女郎花) はコキンレイカ (小金鈴花) とも言い、本州 (北陸~東北地方) の山地岩場などの向陽地に生えます。花は  $6 \sim 8$  月咲き、 1 番花を刈り取った後の 2 番花は 9 月咲きです。茎は高さ $20\sim60$ cm、根切りをして浅鉢に植えるか石付けにした場合は10cm前後の高さで咲かせることができる鉢植え向きの種類です。

オトコエシ(野郎花)はアジアの山野開墾地に広く分布します。花は白色で、草 姿はオミナエシと同じです。白米の男飯(おとこめし)が名の由来です。



### サラシナショウマ

- ●キンポウゲ科
- ●宿根草
- ●開花期 8~10月

### 〈性 質〉

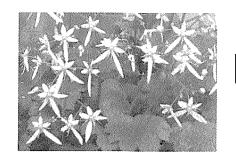
若芽はゆでて水で晒して食べる山菜、根茎は発汗、解熱、解毒剤となる漢方薬です。東アジアの冷温帯~亜寒帯の草原~疎林に広く分布し、富山県下では八尾町以東の山間の林道沿いなどに多く見かけます。茎は高さ40~200cm、葉は3回3出複葉(3枝27葉)、花は白色で20~80cmの穂状花序をなしブラシ状です。花の少ない時期に咲き出すため、一番花は茶花の最高級品となり、鶴首などに一種活けにします。また形が好まれて現代活花にも用いられます。

### 〈栽 培〉

寒冷地の植物なので夏涼しい場所で育てます。地植えの場合は、半日陰の風通しのよい場所を選び、腐熟堆肥 $20 \, \mathrm{kg/m^2}$ をすき込んで土をフカフカにし、幅 $60 \, \mathrm{cm}$ 、高さ $30 \, \mathrm{cm}$ の畦を作り、 $30 \, \mathrm{cm}$ 間隔に $1 \, \mathrm{列植}$ えをします。鉢植えの用土は、赤玉土、硬質鹿沼土、ひゅうが土の小豆粒~米粒大を混合したものとし、尺鉢( $10 \, \mathrm{F}$ ) に  $1 \, \mathrm{ktd}$  えとします。肥料は $5 \, \mathrm{J}$ 、 $9 \, \mathrm{J}$ の $2 \, \mathrm{u}$ 、油粕と骨粉をねり合わせたものを $10 \, \mathrm{g}$  ずつの塊として $1 \, \mathrm{kt}$ に付き $5 \, \sim 7 \, \mathrm{u}$  与えます。夏の暑い時に葉枯れし、株元がムレてくると株ごと腐ってしまいます。夜に涼風があれば病気も出ずに簡単に育てることができますので、環境を第一に考えます。採花をこまめに行ない種を付けさせないことが、花数を多くし、花期を長引かせるコツです。

### 〈近縁種〉

イヌショウマ(犬升麻)は薬用にも食用にもならぬために付いた名ですが、鉢植えに好ましい種類です。本州の特産で、主に関東~近畿の太平洋側の暖温帯の樹林下に分布します。茎は高さ $60\sim90\,\mathrm{cm}$ (鉢植えで $20\sim40\,\mathrm{cm}$ )、葉は $1\,\mathrm{mg}$  3 出複葉(3 小葉のみ)、花は白色でサラシナショウマを小型にした姿です。鉢植えとするため、赤玉土、硬質鹿沼土、ひゅうが土の混合用土で、 $5\,\mathrm{F}$  5 年に1 株植え、肥料は 1 株に付き  $1\sim2\,\mathrm{mg}$  6 個の塊と小量におさえておきます。



### ダイモンジソウ

- ●ユキノシタ科
- ●宿根草
- ●開花期 7~11月(品種により異なる)

### 〈種 類〉

ダイモンジソウの名は「大」の字形の白い小花を付けることに由来し、東アジ アの温帯域(日本、朝鮮、中国、ソ連沿海州、樺太)の海岸~高山の湿った岩上に 広く分布して、変異の幅が非常に大きい植物です。富山県下に自生しているもの はナメラダイモンジソウ(滑大文字草)の特別大柄なタイプで、葉に光沢があり、 9~10月咲き、花茎が長いので茶花に適します。カエデダイモンジソウ(楓大文 字草)は葉の切れ込みが深いタイプで、9~10月咲きです。イズノシマダイモン ジソウ(伊豆乃島大文字草)は葉の毛が多く、10~12月咲き、房総半島南端部と伊 豆諸島に分布します。ナチヒメダイモンジソウ(那智姫大文字草)は紀伊半島南部 に分布する小型のタイプで、葉は3~5裂状となって10~11月咲き、草丈が低く て葉が密生するので浅鉢に植えて盆栽の添えなどに用いられます。ヤクシマダイ モンジソウ(屋久島大文字草)は屋久島産の矮性種で、葉は5裂状で10~11月咲き、 花が葉に比べて大きく鉢植えに好まれます。ウラベニダイモンジソウ(裏紅大文 字草)は石灰岩地帯に分布する葉裏が紅色となるタイプで、9~10月咲き、葉色 がよいので好まれます。ミヤマダイモンジソウ(深山大文字草)は高山型で、7~ 9月咲き、夏に暑がりますが早咲きなので好まれます。他にも変異品種をあげれ ばキリがないほど多数あります。

### 〈栽 培〉

湿った岩地に生えるため、水を好み乾燥は大敵ですが、停滞水も嫌います。夏に暑がるので日陰にして涼しくします。鉢植えとし、赤玉土とひゅうが土の米粒大を等量混同した用土を用い、葉張りの2倍程の間口の浅鉢に植え込みます。肥料はハイポネックスの2,000倍液を週1回潅水代わりに与えるだけです。長梅雨の場合、瘡痂病が発生しますのでダイファーとダコニールを合わせて各々1,000倍となるようにした液で防除します。



# イカリソウ

- ●サンシキュウヨウソウ
- ●メギ科
- ●宿根草
- ●開花期 4~5月

### 〈種 類〉

東アジア〜南ヨーロッパ、北アフリカに約20種が分布し、日本にはイカリソウ、トキワイカリソウ、キバナイカリソウ、バイカイカリソウ、オオバイカイカリソウの5種が自生します。地域変異が大きく、自然交雑種ができ易いため自生種を集めても楽しめます。また、近年出廻るようになった改良種は花色、花形ともにバラエティーに富んだものとなっています。

### 〈性 質〉

落葉広葉樹の林床~林縁に生える多年草で、横走する根茎で宿根します。根茎は細く硬く、多数の根が生えます。根茎の先端部に葉を付け、地上茎はありません。葉には細く硬い葉柄があって、イカリソウ類では1~3回に3出して3、9、27枚の小葉を付け、バイカイカリソウ類では1~2回に2出して2、4枚の小葉を付けます。別名の三枝九葉草はこの細い葉柄が分枝する姿によるものです。

### 〈栽 培〉

林下の植物なので半日陰の水はけのよい適湿の地を好みますが、水やりをしっかり行なえば日なたでも十分に育ちます。繁殖は株分けにより、3月初め~4月上旬、9月中旬~11月末の春秋に行ないます。1 芽ずつ分けて2.5号鉢に植える小作りをしても花は見ることができますが、花を沢山咲かせるには20芽程を一かたまりとして5~7号平鉢に植え込むのがよいでしょう。鉢植え用土は赤玉土、硬質鹿沼土、桐生砂などの米粒~小豆粒大を用います。庭植えの場合は腐葉土を $10\ell/m^2$ 程すき込んで平畦を作り、5~7芽に割った株を30cm間隔に植え付けます。イカリソウは酸性土壌を好みますので石灰施用は禁物です。肥料は5月の花後と9月の2回、油粕と骨粉をねり合わせたかたまりを1株に付き10gずつ与えます。なお、植えかえの間隔は鉢植えで2~3年に1度、庭植えで4~5年に1度とし、株を作り込むと花がよく付きます。



# フクジュソウ

- ●ガンジツソウ
- ●キンポウゲ科
- ●宿根草
- ●開花期 1~4月

### 〈性 質〉

東シベリア、中国東北部、朝鮮、日本に分布しますが、北方の植物であるために南になる程自生量は少なくなり、石灰岩地帯に限定的に生育するだけとなります。花期は自然状態で3~4月、融雪直後から開花を始め、葉の展開とともに伸び上がりながら開花を続けます。花は晴天の日中にのみ全開し、夜間や悪天候時は閉じたままです。地上部は5月末に枯れますが、根株は9~10月に花芽分化をして春に備えます。

江戸時代の中頃に土室に入れて促成する方法が開発され、正月に花を咲かすことができるようになりました。この促成した芽を室芽と言い、芽の皮は黄緑色です。これに対して促成していない掘り取っただけの芽を生芽と言い、芽の皮は白色で、加温しても2月にならないと花が咲きません。室芽は促成した手間の分だけ値段が高く、生芽の2~3倍にもなります。

### 〈栽 培〉

落葉樹の疎林に生える植物なので、冬は日当りがよく、5月の新緑の頃から半日陰になるようにします。植えかえは11~12月、掘り取った株は3~5芽ずつとなるようにドライバーなどでこじって分けます。株分けの際に根を切りつめると株が弱りますので、根は切らないように気を付けます。鉢植え用土は赤玉土の細粒7に腐葉土をフルイでこすって砕いたもの3を混合したものとし、3芽の株なら5号鉢、5芽の株なら6号鉢、7芽の株なら7号鉢と大きめの鉢にゆとりをもって植え込みますと2~3年はそのままで楽しめます。肥料は開花期間中にマグアンプKの大粒を鉢1号に付き1個の割合で与えます。

### 〈同じ管理をする近縁種〉

ミスミソウ(三角草)は一般名をユキワリソウ(雪割草)と呼ばれフクジュソウと同じ正月の縁起物です。ほかにセツブンソウ(節分草)やオウレン(黄蓮)、ニリンソウ(二輪草)などがあります。



# サクラソウ

- ●ニホンサクラソウ
- ●サクラソウ科
- ●宿根草
- ●開花期 4月

### 〈性 質〉

日本、朝鮮、中国東北部に分布します。日本では中部以南は高原地帯、関東以北では平地の原野に生えます。湿った土地を好み、夏にはヨシ、ナツトウダイなどの雑草に埋もれます。花は淡紅色の桜形をして「我国は草も桜を咲きにけり一茶」とも言われ、江戸時代より荒川周辺のものが栽培されてきました。葉は柔らかく焼け込み易く、5月中に地上部が枯れてしまうことがありますが、根は丈夫で生き残っていますので水切れさせないように管理します。

### 〈栽 培〉

春先は日光を好みますので十分に陽に当てます。花後はできるだけ葉を長持ちさせるように半日陰にとり込みます。葉のある間はハイポネックス1,000倍液を週1回与えて肥培に努めます。鉢植用土は赤玉土、硬質鹿沼土、腐葉土の粒径3 mm程のものを等量ずつ混合し、5号鉢に3芽ずつ巴状に芽先を向け合わないように配置して植え込みます。株分けのほか実生も繁殖や育種改良のために行なわれます。5月中旬~6月上旬に採種し、できるだけ新鮮な状態で種子を播きます。種子を乾燥保存すると休眠が深くなって発芽が揃わなくなってしまいます。播種用土は水苔をフルイにこすり付けて粉にしたものを平鉢に3 cm程入れるか、ピート板を用いるかします。本葉3~5枚の時に鉢上げをし、順次鉢替えをしていきますと2年目に花を見ることができます。

### 〈䜣 縁 種〉

サクラソウ属植物は北半球の温帯~寒帯に広く分布し、約600種があります。 日本産のものではシコクカッコウソウ(四国郭公草)、クリンソウ(九輪草)、コイワサクラ(小岩桜)、ユキワリコザクラ(雪割小桜)、オオサクラソウ(大桜草)などが栽培されています。ほかにも、中国~ヒマラヤ産、ヨーロッパアルプス~コーカサス産の野生サクラソウも沢山出廻っていて、春先に園芸店の山野草コーナーをのぞくと種類の多さに驚かされます。



# スミレ

- ●スモトリバナ
- ●スミレ科
- ●宿根草
- ●開花期 4~5月

### 〈種 類〉

全世界の温帯気候下に500種以上あり、日本には59種自生し、約3種が帰化しています。富山県内には25種あり、オオタチツボスミレ、タチツボスミレ、ツボスミレ(ニョイスミレ)、スミレ(狭義の)、アリアケスミレ、マキノスミレ、フモトスミレ、ミヤマスミレ、オオバキスミレ、スミレサイシンなどの自生量が多いようです。スミレ類は地域変異、生態変異が大きい上に、自然交雑種ができやすい特徴を持っています。スミレ類の改良といえばヨーロッパ産の原種を用いたパンジーが代表的ですが、アメリカ合衆国では北アメリカ産の原種を、日本では日本産の原種を用いて改良が進み、多種多様な品種が作られつつあります。現在のところ山野草と園芸植物の中間に位置していると言えるようです。

### 〈栽 培〉

弱酸性の土壌を好むので、用土は赤玉土、硬質鹿沼土、桐生砂など酸性のものをベースにします。林下に生えるものには腐棄土を、特殊地帯に分布するものには各々に応じて蛇紋岩、石灰岩、富士砂、エゾ砂などを配合します。嫌地が起き易い短命な宿根草なので、実生(種まき)、株分け、葉挿し、根伏せなどで繁殖し、株の維持に努めます。肥料はマグアンプKの大粒を用い、鉢1号に付き1個を月1回ずつ施用します。病害虫は多く、春の芽出し時にナメクジ、ヨトウムシ、アブラムシ、5~7月には瘡痂病、秋には根瘤線虫の被害が出ます。ナメクジは捕殺(消石灰を入れた容器に捕えて入れるだけでよい)、ヨトウムシ、アブラムシにはダイシストン、オルトランの粒剤を、瘡痂病にはダイファーとダコニールの水和剤を混合したものを、根瘤線虫にはバイデート粒剤を、各々定期的に施用して防除します。いくら防除をしても嫌地を起こして古株は枯れてしまいますので、植えかえと苗の更新をこまめに行います。

# 5. 室内鉢花観葉類

鉢花や観葉植物は、花、苞、茎、葉などの形や色彩の美しさを鑑賞するものです。鉢植えにすることでより美しく、より長い期間楽しめるもので、洋らん類、1・2年草、宿根草、球根類、観葉植物、花木等非常に多くの種類があります。

### 1. 鉢植えに向く草花。

- (1) 草花が矮性で整っており、花が大輪か、小輪多花性で美しいもの。
- (2) 花もちが良いものや、開花期間が長期間にわたり長く鑑賞できるもの。
- 2. 鉢花を長もちさせるこつ。
- (1) 購入する際の選び方
  - 健全な下葉がついているもの。節間や葉柄が短く葉色の濃いもの。
  - 花や蕾が多く、花色の鮮明なもの。 病気や虫害のないもの。
- (2) 開花期間中の手入れ
  - かん水を十分行います。花に水滴がつくといたみが早まることが多い。
  - 日あたりや通気に心がけ、室内に長く置かない。
  - 花がら摘みを行う。
  - 花期の長いものは、薄い液肥や少量の化成肥料を施す。
- (3) 開花後の手入れ
  - 宿根性や半低木性で花の咲く位置が高くなるものは、切りつめる。
  - 木本性のものは花後に、直ぐ植え替える。
  - 球根類は緑葉を大切に管理し、黄変すればかん水を控え目にして、枯死した ら掘りとり乾燥する。
  - 1年草は種子ができ次第に枯れるので、株をぬきとる。

#### 3. 夏、冬管理のポイント

- (1) 夏の管理
  - 熱帯、亜熱帯原産のものは、水やりと施肥を十分に行い、直射日光を好むも のは屋外で育てます。葉焼けをおこしやすいものはしや光します。
  - 温帯原産のものは、衰弱するので、風通しが良く涼しく明るい日陰におきます。また施肥は行いません。
  - 害虫、病気の発生に注意して、早めに防除します。
- (2) 冬の管理
  - ・寒さに弱い種類は、保温します。家庭では最低6~7℃に保ちます。1日の 温度差を10~15℃以内にします。ガラス越しの日光にあてます。
  - かん水は鉢土の表面が乾いた時に行い、やりすぎは根腐れを起こすので禁物

です。

### 4. 上手なかん水

- 鉢土全体にゆきわたらせます。
- 回数は季節や育ち方により加減します。時刻は暖候期は午前10時頃までに寒 候期は正午頃に行います。
- 1回の量は鉢底から水が流れでるまでたっぷり与えます。
- 水は清潔なものを用い、水温は常温であれば良い。
- 花には水をかけないように注意します。

### 5. 生長調節剤の使い方

栽培目的にかなった方向へ育てる補助的な手段として、最近さかんに利用されています。

- 休眠の打破……ジヘレリン500~1,000ppm:球根類、つつじ類、ミヤコワスレ
- 発根の促進……インドール酪酸(IBA)、ナフタレン醋酸(NAA)、ナフタレン アセチルアミド(NAd) 5~100ppm。
- ・生長の促進……ジベレリン50~100 ppm:キク、ミヤコワスレ
- 生長の抑制……B-9、0.2~1.0%、アンシミドール1~2%、CCC0.1~0.5%:ポットマム、ハイビスカス、シコンノボタン
- ・花芽分化促進……B-9、CCC:アザレア、ブーゲンビレア
- ・ 摘心摘蕾……アトリナール:アザレア
- 開花促進……カーバイト:アナナス、パイナップル 生長を抑制するわい化剤の使用について表 4 を参照して下さい。

### 6. 用土の三原則

- 鉢物用土は、保水性、通気性、保肥力をもつよう配合します。
- 鉢花の種類によって、三原則を加減します。通気性を好む種類は、土の中に 空気を増すよう配慮します。
- 土の粒子が細かいほど保水性、保肥性に富みますが通気性は乏しくなり粒子が荒いほど逆になります。

図1を参照して下さい

### 7. 鉢物用土の種類とおもな特徴

種		類		主	な	特	徴	٤	用	途
赤	玉	土	火山灰土 有機質、 として使	病原菌	を含ま					本花の基本用土
H		土	力保肥力	に富み	鉢花用	土と	してはi	最高で	あるが、	上に最適、保水 地域によって 吏用することは
ЛП		砂	用するに ものより るが乾燥	は円粒 大粒 (i しやす	よりも 直径 2 - い。	角の ~ 3 m	多い粒- n)のもの	子 (川 <i>の</i> のがより	)上流がい。空気	用土として使 よい)で細かい 気を保つ力はあ
鹿	沼	土		気性共	に富み	、さ	し木用ニ	上とし <sup>.</sup>	て、ある	質の土である。 らいはさつき用
الله الله	<b>F</b>	モス	い。一般	にピー	トとよ	ばれ	保水性(	こ富む。	。細かい	つで、酸性が強 い種子の播種用 目いられる。
腐	葉	土	なものが 果もある	多い。 。 土とし	適当に	保水	性、通复	え性がる	あり、用	が、最近は粗悪 型料としての効 このできない用
水		苔	山の谷に 洋ラン、							〔性も大である。
バーミ	キュ	ライト		る。膨	軟で、	保水、				弱色で金属性の 乗菌なので、さ
バー	ラ	イト		しても					-	_質である。梱 ×バーミキュラ
石川	ラ・	イト	石川県金							Eく、多孔質で 質である。
7	の	他		オスマ	マンダ (	熱帯	生シダ類			ク(樹皮を粉砕 、人工水苔(ポ

### 8. 鉢の種類と用土

• おもな鉢の形には下記の図のようなものがあります。



• 材質は土鉢(素焼鉢、塗り鉢、飾り鉢)とプラスチック鉢があります。

### 1) 素焼きばちとプラスチックの長所と短所の比較

種類	長 所		短	所
素焼きばち	<ul><li>通気性がよく根の発育によい</li><li>水もよく蒸発するので、過湿りにくい。</li><li>夏は、はち土の温度があがりい。</li></ul>	にな	<ul><li>・重く扱いにくい。</li><li>・乾きやすい。</li><li>・表面にそう類が</li><li>・こわれやすい。</li></ul>	~
プラスチックばち	<ul><li>・乾きにくく水やり労力が少な</li><li>・軽くて扱いやすく、こわれに</li><li>・表面にそう類がつかず、汚れんたんにとれる。</li><li>・冬ははち土の温度が高い。</li><li>・比較的安価である。</li></ul>	< 1,0	<ul><li>やや過湿になり</li><li>夏は、はち土のいい。</li><li>草たけがのび、まのはたおれや</li></ul>	温度があがりやす 重心がうえになる

### 2) 鉢の号数と内径および容積

規格号数	内 径	容 積	規格号数	内 径	容 積
2.5号ばち	7.0cm	約 180ml	4.5号ばち	12.5cm	約 1,100ml
3 %	8.5 /	280	5 /	14.0 %	
3.5 %	9.5 /	420	6 %	17.0%	√ 2,400  ∕
4 "	10.5 /	700 /r	7 "	20.0 %	/ 3,000 /

### 3) おもな鉢物の用土配合例

種 類	田 土 赤 玉 土	腐葉土	ピートモス	川 砂	積み肥
シクラメン	4	2	1	1	1
プリムラ類	4	2	_	_	and the second
ポインセチア	4	1	2		
ゼラニウム	4	2	_	AAATONIN.	
ベコニア類	4	1	1	1	_

### 表1 鉢花の種類による肥料の要求量

区別	種類
肥料の要求量の少 ないもの	アジアンタム・アザレア・アンスリウム・フリージア・カトレア・デンドロビウム・プリムラニオプコニカ・グラジオラス・ツバキなど
肥料の要求量の中	エクメア・ガーベラ・アフェランドラ・アネモネ・シクラ
位のもの	メン・グロキシニア・バラなど
肥料の要求量の多	ポインセチア・ハイドランジア・セントポーリア・カー
いもの	ネーション・キク・ラナンキュラスなど

### 表 2 鉢花に適するおもな種類

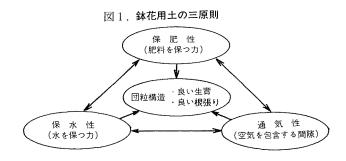
	鉢 花 名
1 年 草	アゲラタム、アサガオ、トルコギキョウ、ニチニチソウ、 ペチュニア、カルセオラリア、シネラリア、インパチェン ス、パンジー、ワスレナグサ、ハボタン
宿根草	ポットマム、ゼラニューム、ペラルゴニューム、ベゴニア センパフローレンス、エラチオールベゴニア、ガーベラ、 スズラン、セントポーリア、クンシラン、ストレプトカー パス、プリムラ類
球根	グロキシニア、シクラメン、ロードヒポキンス、カラジューム、アンスリューム、チューリップ、ラナンキュラス、アネモネ、ヒアシンス、アマリリス、カラー
花木	アザレア、ハイドランジア、ポインセチア、ハイビスカス、 ブーゲンビレア、ゲンペイカズラ、サンタンカ、アフエラ ンドラ、デプラテニア、のぼたん、ランタナ
多 肉 植 物 サ ボ テ ン	カランコエ、シヤコバサボテン、イジヤクサボテン、ロケ ヤ、ハナキリン
洋 ラ ン	カトレア、デンドロビューム、シンビジューム、フアレノ プミス、オンシジューム、パフィオペイルム、シルトニア、 バンダ

### 表 3 日光が少くて良い鉢花

・半日くらい日光が必要な鉢 花	• 反射光くらいでよい鉢花
カルセオラリア、球根ベゴニ ア、クンシラン、リーガース ベゴニア	セントポーリア、フアレノプ シス

表 4 生長調節剤による抑制処理

	植物名	希 釈 率	適期、処理 方法
	アサガオ	200~300	摘芯10日後。さらに15日後。茎葉に散 布
	アザレア	200	摘芯40日後。茎葉に散布
В	カランコエ	200~300	摘芯20日後。茎葉に散布
	キキョウ	200~300	摘芯10日後。さらに20日後。茎葉に散 布
1	キク	200~300	摘芯5日後。さらに20日後。茎葉に散 布
9	コリウス	200~300	摘芯10日後。茎葉に散布
	ストック	200~300	草丈5cmのころ。茎葉に散布
処	ダ リ ア	200~300	草丈15cmのころ。さらに15日後。茎葉 に散布
理	ハイドランジア	200~300	摘芯20日後。さらに春芽が伸びたころ。 茎葉に散布
İ	ポインセチア	200~300	摘芯2~3週間後。茎葉に散布
	ラナンキュラス	300~500	発芽30~40日後。さらにつぼみが見え たころ。茎葉に散布
	キンギョソウ	50~100	摘芯20日後。鉢土に潅注
スリ	クレロデンドロン	100	側枝の長さ約5~10cmのころ。鉢土に 潅注
	ゼラニューム	100	摘芯20日後。鉢土に潅注
}	ブーバルジア	100	摘芯7日後。鉢土に潅注
	ホクシア	100	摘芯30日後。鉢土に潅注
如	ポインセチア	100	摘芯2~3週間後。鉢土に潅注
理	ユリ	100	発芽し始めたころ。鉢土に潅注
41.	リーガース・ベゴニア	150	摘芯20日後。鉢土に潅注





### シンビジウム

- ラン科
- 非耐寒性常緑多年草
- ●開花期 種により異なり周年

### 〈性 質〉

洋ランのなかで、最も家庭に普及しているランです。日本趣味に合った美しさと、洋ランの持つ豪華さとを兼ね備え、花と葉のバランスもよく、鉢物として贈答用に最もよく使われています。栽培は容易で、低温に強く、温室がなくても栽培できます。

### 〈購入上の注意〉

シンビジュウムは一つの花茎につぼみが20個前後ついていて、下から上に向って咲いて行くもので、これが6~7分咲きのころに購入すると長く楽しめます。この時注意することは、葉にハダニやスリップスのあとがなく、カイガラムシなどがついていないかどうかを確めることです。

### 〈管理〉

開花株はできるだけ暖かい室内に置きますが、暖房器の近くには置かないこと。 室内が乾燥したときは霧水を与えますが、花にはかけないようにします。

花は2ヶ月以上楽しめますが、鉢で1ヶ月観賞したら株が弱らないように切り取って、あとは切り花として観賞するようにします。

- ・温度……花を咲かせるには12℃以上を必要としますが、枯らさずに越冬するだけならば3℃程度に保ってやります。
- 水……春から秋までは生長期のためよく乾くので、毎日1回与えますが、特に夏は夜間を涼しくするために、周囲の地面にも散水します。
- 肥料……油粕と骨粉を等量に混ぜた置き肥を5月上旬、6月上旬、7月上旬の3回与えます。このほか液肥を4月下旬~9月上旬まで月3回与えます。冬は与えません。
- 植え替え……鉢からバルブが外にはみ出るようになれば植え替えをします。鉢いっぱいに生育した株は鉢から抜いて、ひとまわり大きな鉢に植え替えます。 株分けをする場合には少なくとも3バルブ以上を基準に植えます。 シンビジュウムの新芽は1バルブから1芽を原則とします。



# カトレア

- ●ラン科
- ●非耐寒性常緑多年草
- ●開花期 種により異なり周年

### 〈性質〉

カトレアは洋ランの代表として、最もよく知られており、その花の豪華さと美しさから花の女王と呼ばれています。現在栽培されているカトレアはレリア、ソフロニティス、プラサボラなど、類似の属との間で作られた属間交配種が多く、おびただしい数の品種が作り出されています。

### 〈購入上の注意〉

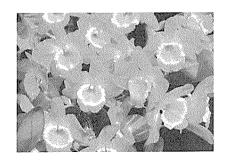
一年中鉢花として出回るようになってきたが、量として多いのは秋から冬の間です。加温室があり10℃以上保てるなら、花の咲いている時期に花の良否やウイルスの程度などを判定して購入できますが、保温できない場合は春から夏に購入します。

### 〈管理〉

開花株を購入したら、なるべく暖かい室内に置きますが、暖房器具のそばとか、 温風の当たる場所は、湿度不足で花が早くいたむので避けます。弱光線を好む性 質なので、常時窓辺に置く必要はありませんが、2日に1度くらいはガラス越し の光(レースのカーテン越しの)に当ててやります。

5月中旬から9月下旬までは戸外で管理すると生育がよく、50パーセント程度 のしゃ光をし、風通しのよい場所に吊して夏を涼しく過ごさせます。

- ・温度……越冬するだけなら10℃、開花させるなら15℃は必要です。
- 水……・植え込み材料(コンポスト)の表面が乾ききったときに鉢の底から水が流れ出るまで、たっぷりと与えます。梅雨時はそのまま雨に当ててよく、梅雨明けから9月中旬頃までよく乾くので、毎日1回必ず与えるようにします。
- 肥料……施肥は生育期のみとし、ほかの時期に与えません。油粕と骨粉を混ぜた置き肥は5月と6月に与え、ハイポネックス等の液肥は10日に1回くらいの割合で与えます。 '
- 植え替え……株が鉢いっぱいになった時や、植え込み材料の水ゴケが腐ったと きには植え替えますが、およそ2~3年に1回の割で行ないます。



### デンドロビウム

- ●ラン科
- 非耐寒性常緑多年草
- ●開花期 種により異なり周年

### 〈性 質〉

原産地はヒマラヤ、インドから東南アジア、オーストラリアにかけてで、日本 に自生するセツコクも同属の植物です。

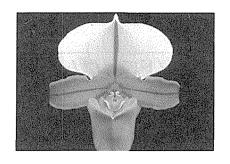
### 〈購入上の注意〉

ノビル系、デンファレ系(ファレノプシスタイプ)いずれも鉢物として購入する 場合は、半分くらいが未開花のものをさがすと長く観賞できます。

### 〈管 理〉

ノビル系のギンギアナム、モニーリフォルメなどは低温で越冬できますが、デンファレ系は高温に管理する必要があり、管理の方法が異なります。梅雨どきは根の成長を悪くするので室内で育てますが、一般的に5月から10月までは戸外に出して直射日光に当て、充実した株に育てます。

- ・温度……ノビル系は $7 \sim 10$   $\mathbb{C}$  が最適で、 $2 \sim 3$   $\mathbb{C}$  の低温でも水やりに注意をはらえば十分に越冬します。デンファレ系は最低 5  $\mathbb{C}$  を保てば越冬できるが、失敗の危険は大きく、10  $\mathbb{C}$  以上を保つようにします。
- 水………夏は生育期で、十分な水やりが必要ですが、常に湿っているのはよくないので、少し乾いたら十分に与えるという方法を繰り返します。9月中旬以降はバルブの成熟期になるので、水を控えめにして、表面が乾いてから3~4日して潅水します。秋は乾きぎみにして低温に当てることが花芽をつけるこのです。
- 肥料……他の洋ランに比べて、少なめに与えます。ノビル系は油粕と骨粉を混和した置き肥と液肥を併用し、8月上旬頃には打ち切って、その後花が終るまで与えません。
- 植え替え……植え替えの時期は、開花直後が適しており、株分けを兼ねて2年後に行なうのがふつうです。古いコンポストを半分くらい取り去り、新しいコンポストに植えます。また早くふやしたい時は、花の終った茎を切り取り、これを節ごとに輪切りにして水ごけにさしておきます。



### パフィオペディルム

- ●ラン科
- 非耐寒性常緑多年草
- ●開花期 種により周年

### 〈性 質〉

日本人向きの渋みのある、おちついた色彩と特異な花形で、愛好家の間に人気があります。原産地は熱帯~亜熱帯ですが、日差しの少ない湿地帯や石灰岩の岩肌などに根を張って育成しているので、日本の夏の暑さは苦手とします。系統により、耐寒力には差がありますが、比較的栽培は容易な部類に入ります。

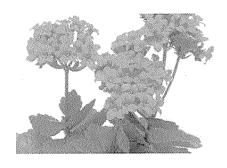
### 〈購入上の注意〉

根がいたんでいる株はいかによい花を咲かせていても、葉につやがなくなっています。こうした株は花が終ると同時に株がいたみだし、回復するまで花が咲きません。

### 〈管理〉

日陰を好む植物なので、一年中屋内で育てることができます。戸外で直射日光 に当てると葉が黄色くなり、株も衰弱して花が咲かなくなります。また湿気を好 むので過湿にならない程度に、一年中根に湿りを与えておきます。

- 温度……比較的低温に強く、5℃以上あれば冬を越すので、温室がなくても栽培できますが、適温は10~25℃です。斑入り葉系は冬期温度10℃以上を必要とします。
- 水………十分な空中湿度を保つことと、過湿にならぬ程度で水をたっぷり与えます。一年中コンポストが乾かないように注意し、鉢の表面が乾きかけたころにたっぷりと水を与え、鉢中の古い水や空気を入れかえます。
- 肥料……肥料が多すぎると、根腐れを起こしたり、葉が軟弱になって病気にかかりやすくなります。置き肥えは5月上旬と6月中旬に与え、液肥はハイポネックス2000倍液を5月~10月まで、月に2回くらい与えます。
- 植え替え……温室では花後に行ない、家庭では4月~5月に行ないます。水苔で植え替える場合は、カトレアのように硬く植え込まずに、多少軟らかめにします。またその時、カイガラムシ等がついていないかどうかを確めます。



### カランコエ

- ●ベンケイソウ科
- ●非耐寒性多年草
- ●開花期 冬~春

### 〈性 質〉

この属には、大型のものから小型のものまで約100種に及び数多くの多肉状の種が含まれています。一般にカランコエで知られているものは、葉が肉厚で乾燥に強く、コンパクトな草姿であり、花は冬に咲き、長もちするという利点もあって、古くから鉢花として人気があります。

### 〈購入上の注意〉

育てやすい草花ですが、よく枝分かれした茎をもつ株を選んだほうが花数も多く楽しめます。カイガラムシなどの害虫もついていないかどうか確かめて選びます。

### 〈管 理〉

春から秋までは戸外の風通しのよい所に置きます。冬は室内で2日に1度はガラス越しの日光に当てないと株が弱ります。

戸外栽培の場合の日当りは、春と秋は西日を除いた直射日光に当ててもかまいませんが、夏の日中だけは弱光線の下に置きます。

- ・温度……最低温度 5 ℃で生育をつづけ、15 ℃以上で花芽を分化します。開花させるには 8 ℃くらいの最低温度で十分です。
- 水……多肉植物ですから、鉢土が常にぬれていると、根腐れを起こします。 特に高温多湿の夏の間は、鉢土の表面がかわいてもすぐ水を与えないで、2~ 3日に1回くらいにします。
- 肥料……濃い肥料をきらいますから液肥を使い、10日に1回の割合で与えます。 置き肥をするのは避けたほうが安全です。
- 植え替え……同じ鉢に長く植えたままにしていると、育ちが悪くなるので、2 年に1回は新しい土で植え替えます。植え替えの適期は春か秋です。

### 〈繁殖〉

種まきは5月頃に行な、さし木は春の終り頃に行うと、よく発根します。



# シクラメン

- ●サクラソウ科
- ●非耐寒性多年草
- ●開花期 11月上旬~4月上旬

### 〈性 質〉

シクラメンの名はギリシャ語で「円形」を意味し、花の終った花梗が、ら旋状 に巻いて輪を作ることに由来しています。

### 〈購入上の注意〉

第一に下葉や葉冠の一部が黄変していないもの、葉をかき分けてみて生長点部の葉やつぼみが黒変して硬く乾いたようになっていたり、葉が反転しあるいは萎縮しているもの、葉の一部が黒ずんだり、葉柄や花梗の一部が軟らかく腐っているもの、カビが生じているものなどは避けます。

### 〈管理〉

冬の間は、室内の日当りのよい場所で十分に日光浴をさせます。夜、ストーブの近くに置くと、乾燥しすぎたり、暖房がきれたときの温度差が大きすぎて、株をいためる原因となります。

- ・温度……適温は、昼温18℃以下、夜温4~7℃と涼しい気候を好みます。
- 水……過湿はさけ鉢の表土が白く乾いてきたらたっぷりと与え、次からも同様に行います。
- •肥料……開花期から花が終るまでは月に1~2回くらい薄い液肥を与えます。
- 夏越し……花が終ったら、初夏の頃から夏一杯は、なるべく涼しい戸外で強い 日光に当てないようにしながら、休眠に入らないように9月まで管理します。
- 植え替え……9月に入ったら用土は田土と腐葉土を半々くらいに混ぜたものを 用意し、ひとまわり大きな鉢に球根を半分出して植えてやります。

### 〈開花促進剤の活用〉

シクラメンの花を年内に咲かせるためには、10月上旬頃にベンジルアデニン液剤の200~300倍液を、葉をかきわけて、小さなつぼみにスプレーで2~3回散布します。この薬剤をかけることにより、小さなつぼみを早く肥大させ、自然開花より30日くらい早く花を咲かせることができます。



# グロキシニア

- ●イワタバコ科
- ●非耐寒性多年草
- ●開花期 4~10月

### 〈性 質〉

グロキシニアは、春から初夏にかけて華やかな釣り鐘状の赤、紫、白などの大輪花を咲かせる。この植物はブラジルを中心に約30種ほどが認められ、塊茎を有する球根植物ですが、実生や葉ざしで簡単に栽培できるために、特殊なもの以外は、実生で1年草的に栽培しています。

### 〈購入上の注意〉

葉に傷みがない、花蕾や葉数が多くて、株がぐらつかないものを対象とし、あ とは鉢としての美しさ、好みの色を選びます。

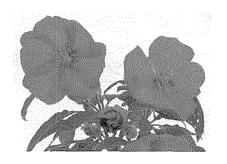
### 〈管 理〉

直射日光にはとても弱く、特に夏の強光線に当てると、葉が日焼けを起したり、 高温障害で花が咲かなくなったりします。直接日の当らない、明るい室内で育て ます。

- 温度……20℃前後の温度を必要とするため、一般の家庭では5月に入ってから 購入し、育てるようにします。
- 水……やや多湿を好みます。鉢土がかわいてきたら、葉にかけないように注意して、たっぷりと水を与えます。ときどき霧を吹いて、空中湿度を高めます。
- 肥料……薄い液肥を1ヶ月に2回くらいの割合で与えます。休眠期(花が終ったあと)は、水と肥料を徐々にひかえ、鉢ごと乾燥させるようにします。芽が動き出したら植え替えて肥料を与えます。
- 植え替え……時期は  $4\sim5$  月で、球根がわずかに隠れるほどの浅植えとします。 芽が出たら良い芽を 1 つ残してかきとり、かきとったものは、川砂などにさしておけばふやすことができます。

### 〈繁殖〉

種をまく場合は、10月か2~4月にまいて温室で育てます。葉ざしでふやす場合は、6.7月に葉柄をつけて砂にさします。花後、冬越しした球根が大きい場合は、いくつもの芽が出ているので数個に切り分けてふやします。



# ノボタン

- ●ノボタン科
- 常緑広葉低木
- 開花期 6~10月

### 〈性 質〉

熱帯アメリカ原産の植物です。花色は鮮やかな紫紺色ですが、株によっては赤みを帯びるものもあります。一つ一つの花は短命で、1日で散りますが、毎日のように次々と咲き続けます。魅力的な美しさとともに育てやすい鉢物といえます。 〈購入上の注意〉

花屋さんに売っている鉢は、わい化剤処理をしてあるため、あまり伸びていませんが、購入後、わい化剤が切れてくるとぐんぐん伸びるので、葉の色のよい、よく枝分かれした、しっかりとした株を選びます。

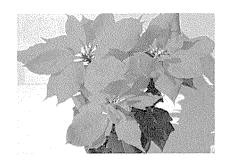
### 〈管 理〉

直射日光を好むので、4月~9月頃までは戸外に置いて育てます。日照不足では花が咲かないことがあります。冬は寒さに弱いので室内で育てます。枝を切りつめ、水やりを控えて乾燥ぎみにし、日当りのよい窓辺で冬越しをさせます。このとき枝を強く切りつめると、翌年、花の咲くのがおくれます。

- ・温度……冬の間も花を見るには、最低20 $^{\circ}$ 以上は必要ですが、冬を越すだけなら3~5 $^{\circ}$ で十分です。
- 水……...夏は毎日たっぷり与え、冬は控えめで5日から1週間に1回の割で与えます。
- 肥料……肥料は少なめに与えます。特に窒素肥料が多すぎると株が徒長し、花がつきにくくなります。
- 植え替え…… 4 月下旬に新しい土で植え替えます。用土は赤玉土と腐葉土を混ぜたものでもよく、また田土でもかまいません。古い根は切りつめます。

### 〈繁 殖〉

株分けもできますが、普通はさし木でふやします。5~6月に、充実した枝を とってさします。用土は川砂や赤土、バーミキュライトなどを用います。



# ポインセチア

- ●トウダイグサ科
- ●非耐寒性低木
- ●開花期 11~12月

### 〈性質〉

中南米の高地原産で、クリスマスを彩る鉢物として有名であり、11月初旬には もう店頭にならびます。最近の改良種は春まで葉や花が落ちず、長く楽しむこと ができます。

ポインセチアは短日植物で、日長が12時間半を下まわるようになると花芽分化を始める植物ですが、観賞に供される美しい部分は苞で、花は頂部に小さく咲きます。

### 〈購入上の注意〉

茎が太く、花苞が大きく、がっちりした株を選びます。花苞の中央に並んだ小花が2~3個開いてきたときが購入適期です。購入する時、株元が黒ずんでいたり、花苞や葉がたれさがっているものはさけたほうがよいでしょう。

### 〈管 理〉

耐寒性の強いものでは、居間などに置けば、冬中、十分に観賞できます。日中は窓ぎわや縁側に置いて、できるだけ日光に当てます。夜は室内に置きますがストーブの近くには置かないようにします。

- ・温度……10℃程度は保ちたいが、5℃でも耐寒性の品種は大丈夫です。
- 水……生育期は十分に与えるが、観賞期は少しひかえめとし、鉢の表面が乾いてきたら与えます。
- 肥料……10日に1回くらいの割合で水やりを兼ねて、液肥を与えます。冬は与えないか、1ヶ月に1回液肥を与える程度にします。

### 〈繁 殖〉

さし木で行ないます。6月中~下旬に伸びた茎の頂部を10センチくらいに切って、切り口を水につけ、白い汁液を洗ってから、川砂かバーミキュライトにさします。

### 〈病害虫〉

さし木をして根が出たものを鉢に植えますが、その時、高温であれば地ぎわから枯れることがある。これはリゾクトニアによるもので、ポマゾールFやオーソサイドを水に溶かして鉢の中へ注いでやります。



### シャコバサボテン

- ●クリスマスカクタス
- ●サボテン科
- ●非耐寒性常緑多年草
- ●開花期 11~12月

### 〈性 質〉

ブラジル原産で長さ4センチ、幅2センチくらいの茎節を連ね、その先端に花をつける。側縁の突起が鋭い形態のものをシャコバサボテン、丸みを帯びたものをカニバシャボテンといい、シャコバサボテンは比較的早く開花することから、クリスマスカクタスともいわれています。

### 〈購入上の注意〉

次々につぼみが出てきて咲くというのではなく、今、ついているつぼみが咲き きると花は終りなので、つぼみの多い株を選びます。

### 〈管理〉

5月から9月いっぱいは戸外で育てます。真夏の日中は半日陰の所に置き、強 光線をさけて育てます。秋になってからは、よく日に当てます。9月下旬頃から 小さなつぼみが見え始めますが、この時、置き場所を変えたりして環境が急に変 わるとつぼみが落ちることがあります。

短日植物で、日が短かくなると花が咲きます。室内に置いてある場合、電灯の明るさに感じて花芽ができないことがあるので注意します。また、つぼみの小さい頃に空気がかわきすぎていると、つぼみが落ちてしまうことがあるので、ときどき霧吹きで、葉にもつぼみにも十分湿りけを与えます。

- ・温度……花のつく前は夜温を13<sup> $\circ$ </sup>、つぼみが見えたら16 ~20<sup> $\circ$ </sup>、日中は20  $\circ$  以上に保ちます。冬は3 ~5  $\circ$   $\circ$   $\circ$  でよく、室内の暖かい所に置けば越冬します。
- 水……春から夏にかけては、葉水も兼ねてたっぷり与えます。8月は水やりを控えて乾燥ぎみに育てると、花つきがよくなります。低温になるにしたがって、水やり回数を減らし、冬の間は乾かさない程度に与えます。
- ・肥料……生長期の $5\sim7$  月には油粕に骨粉を混ぜたものか緩効性肥料を $1\sim7$  に 1 回置き肥として与え、また 2 週間に 1 回液肥も与えるようにします。
- 植え替え…… 3月下旬から4月に、ひとまわり大きい鉢に植え替えます。根は 過湿をきらうので、排水のよい土に植えます。



### セントポーリア

- ●イワタバコ科
- ●非耐寒性多年草
- ●開花期 周年

### 〈性 質〉

東南アフリカに約11種の自生をみる、温室性の多年草です。

### 〈購入上の注意〉

葉がそろっていて枚数が多く、つやのあるものを選びます。下葉がたれていたり、徒長的なものは避けます。鉢土がぬれているのに葉先がたれているのは、根腐れの心配があります。

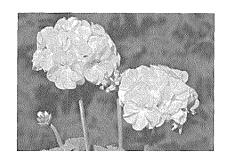
### 〈管 理〉

セントポーリアは薄日を好む草花です。夏はレースのカーテン二重越しくらいの日光に当て、冬でも晴れている日は、レースのカーテン一重越しくらいの薄日にします。夏に風通しの悪い場所に置くと、軟腐病が発生します。

- ・温度……18~25℃が理想的ですが、四季のはっきりした日本の気候では、夏と 冬が最も注意して栽培する必要があります。冬は室内に置いても5℃以下にな ると枯れるので、ワーテアンケースなどに入れて保護します。
- ・水……・鉢土の水分はほどほどにし、温度を高めるとよく咲きます。根元への水やりは、葉の先端が少したれてしおれるようになってから行ないます。冬は暖房により空気が乾くので、夜間1~2回葉に霧をかけます。水やりは、冬は午前10時頃、夏は朝早くか、夕方がよいでしょう。
- 肥料……肥料は油粕のような窒素質の肥料はやめ、ハイポネックス等の液肥を 月2~3回与えます。場合によってはマグァンプKやIB化成等の緩効性の化 成肥料を4号鉢で2~3g程度鉢土の表面に置いてやります。
- 植え替え…… 2 年以上たった株は大きくなるため、春に植え替えます。用土は 腐葉土を主体に軽くて水はけのよい土を用います。

### 〈繁殖〉

葉ざしが最も簡単で、必ず葉柄の一部をつけ、川砂かバーミキュライトにさします。繁殖の適温は20~22℃で、湿度を保つことが大切です。



# ゼラニューム

- ●フウロソウ科
- 非耐寒性多年草
- ●開花期 周年

### 〈性 質〉

園芸上ゼラニュームと呼ぶのは、南アフリカ原産のペラルゴニューム属のインクイナンスとゾナーレ、および交配種のホルトルムなどで、ゲンノショウコやフウロソウを含む植物学上の分類の属とは区別されます。

四季咲き性が強く寒さにも強いことから、最近はよく花壇、ベランダの装飾に 利用されています。

### 〈購入上の注意〉

葉が大きすぎず、しまった感じの株を選んで購入します。葉が黄ばんでいたり、 根元が黒くなっているものは避けます。

### 〈管理〉

夏季の高温多湿をきらい、乾燥には比較的強いが、過湿には弱く、根腐れを起こします。落ちた花がらが葉についたままになっていると、そこから灰色かび病などが発生することがあります。咲き終った花や枯れ葉は、そのつど取り除きます。

- ・温度……冬期の生育温度は8~10℃であるが、凍らさない程度にすれば十分越 冬します。
- 水……比較的乾かし気味の方が生育がよく、過湿になると腐りやすい。梅雨の時期は雨に当てないようにとくに冬は乾燥気味に保ちます。
- 肥料……生育の旺盛なものなので十分に与えるが、水をやる量が少ないために 分解も少ないので、置き肥よりも液肥として与えます。
- 植え替え……植え替えは毎年行ない、根と地上部のバランスを考えて切り詰め、 毎年同じような鉢の大きさに保ちます。

### 〈繁 殖〉

種子をまいてふやすこともできますが、さし芽でよく発根します。4~6月、9~10月が適期です。葉を3~4枚つけて節のすぐ下で切り、下葉を落して、川砂、鹿沼土、パーミキュライトなどの清潔な挿床にさします。



### クジャクサボテン

- ●サボテン科
- 非耐寒性常緑多年草
- ●開花期 春~夏・冬

### 〈性 質〉

クジャクサボテンはエピフィルム属で代表されるものが多く、園芸的に多くの属の交配によって作られています。エピフィルムの名は、「エピ(着生)」と「フィロン(葉)」の二語からなります。開花期は、春のものが多いが、中には冬のものもあり、昼咲きと夜咲きのものに区別されます。

### 〈購入上の注意〉

買う時には、葉(葉状茎)の多い、大きな株を買います。あまり小さな株では、 開花に必要な大型の葉を出す力がありません。長く厚みのある葉が5~6枚以上 あれば、来年も花を見ることができます。

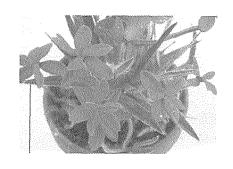
### 〈管理〉

株の高さは60センチくらいで止めます。50センチくらいに伸びた葉は、先端を摘みとって、伸びを止めます。この葉から出る芽は、先のほうに出るものは1センチくらいを残して先端を摘みとり、株元から出る芽は伸ばします。株の形を整えるばかりでなく、株を充実させるために、不必要な芽は取り除きます。

- ・温度……夜温10~13℃、昼温20~22℃を目標とし、冬期の夜温はつぼみのつきをよくするために低めに保ちます。
- 水………4~8月中旬までは十分に水を与え、8月下旬~9月下旬までは翌年 の花つきをよくするために、全く与えません。冬は極力潅水を控えます。
- •肥料……2週間に1回、薄い液肥を与えます。花が咲き終ってから8月までは月に1回ほど、油粕を水で練って置き肥として与えるのも効果があります。
- 植え替え…… 2~3年以上たつと、鉢が根でいっぱいになるので植え替えをします。ベニクジャクサボテンは4~7号鉢に、月下美人は高さが1.5メートル位になるので7~10号鉢に植えます。4~5月頃が適期です。

### 〈繁殖〉

初夏から夏にかけて茎節を10センチくらいの長さに切り、切り口の乾燥を待って(普通3~4日ほど放置する)川砂にさします。



# ロードヒポキシス

- ●アッツザクラ
- ●ヒガンバナ科
- ●非耐寒性多年草
- ●開花期 4~6月

### 〈性 質〉

属名のロードヒポキシスは、バラ色の花の咲くキンバイザサ属ということを意味します。一般にはヒガンバナ科に入れられているが、キンバイザサ科に独立して分類されることがあります。俗にアッツザクラの名で呼ばれているが、アッツ島には関係がなく正しい呼び方ではありません。南アフリカ・ナタール産の一属一種の植物です。

### 〈購入上の注意〉

特に問題はない。

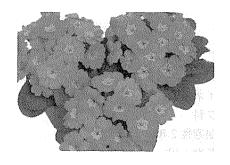
### 〈管理〉

生育期間中は十分日光の当たるところで栽培すると、開花時の姿がコンパクトになり、分球も旺盛になります。葉が枯れたあとも鉢植えの状態で、土が湿り気を保つように管理し、翌春植えかえます。

- 温度……冬は休眠して葉が枯れているが、鉢や箱植えの場合は凍らぬように注意します。
- 水……根部は球茎をしており、過湿は禁物で、特に真夏の高温時は湿らせす ぎるとよく腐るので、乾かし気味とします。また休眠期は水やりを中止します。
- 肥料……春から夏の生育期には毎月1回油粕の置き肥か、固形の化成肥料を与えます。なお、真夏の時期は少しひかえめとします。
- 植え替え……素焼き鉢でもプラスチック鉢でもよいが、3号か4号の平鉢を用意し、3号鉢に5~6球植えとします。あまり深植えとはせず、球の先が少し出る程度に植え込みます。

### 〈繁 殖〉

分球による。春に分球した小球は、トロ箱やプランターに植えて養成するとどんどん大きくなり、ふえてくれます。1年の培養で開花株となるから楽しみです。



# プリムラポリアンサ

- ●ポリアンサス
- ●サクラソウ科
- 非耐寒性宿根草
- ●開花期 1~3月

### 〈性 質〉

プリムラは、ラテン語のプリマ(最初)からつけられた属名で、早春に咲き出すことにちなんでいます。英名のポリアントゥスの名でも親しまれている本種は、ヨーロッパ原産の3つの種が交雑されてできた園芸種で、古くから花壇用として利用されることが多かったが、パシフィック・ジャイアント系が育成されてからは、鉢物としての需要が増大し、現在に至っています。

### 〈購入上の注意〉

花茎が太く、花茎数が多く、葉数が多く、濃い緑をした輝きのある葉をもっているものがよい。もちろん、花数が多く、花が正形で大輪、色彩の鮮明なものを選びます。

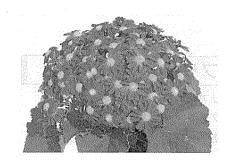
## 〈管 理〉

日中は、日のよく当る窓辺や、縁側などに置きます。この仲間はプリムラのうちでも寒さに強く、かなりの低温でも育つが、年末から花を咲かせるためには秋おそくフレームに入れて加温してやります。

- ・温度……夜温3℃以上の条件のところに置けば大丈夫です。しかし、反対に夏の蒸し暑さには弱く、7~8月は日陰の涼しい場所に置きます。
- 水……十分に与えるが、冬期で凍る心配があるときは正午前後に与えます。 受け皿に水をためておくと根腐れの原因になります。
- •肥料……花の時期が長いので、2週間に1回、薄い液肥を与えます。濃すぎる と肥料まけします。
- 植え替え…… 7月~9月初めの暑い間は、植え替え、株分けをひかえます。

## 〈繁 殖〉

春の花が終ったら半日陰の地に鉢を抜いて植え、秋の彼岸のころに株分けをして、日当りに出します。



# シネラリア

- ●サイネリア
- ●キク科
- ●非耐寒性2年草
- ●開花期 12~4月

### 〈性 質〉

わが国にこの花が伝えられたのは、明治10年(1877)で、別名をフウキギク(富 貴菊)と呼ばれ、以来ずっと西洋草花の代表的な花として親しまれています。ま た「シ」という音が縁起が悪いので「サ」と読み変えられ、一般にはサイネリア といわれています。

### 〈購入上の注意〉

草姿が低くまとまり、植物として徒長していないもの、葉が枯れていないもの、つぼみの数が多く、花の形のよいものなどに注意し、あとは花色が多いので好みにあった色を選びます。

### 〈管理〉

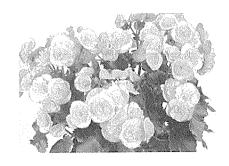
日当りの悪い室内に長く置くと、徒長したり花色があせてくるので、日中はできるだけ日当りのよい窓辺に置きます。

- 温度……比較的寒さに強い植物ですから、高温にする必要はなく、5℃あれば 十分です。0℃以下にならなければ枯れる心配はありません。
- 水……業が大きいため、水分の蒸散量も当然多いので、水やりは1日1回鉢 の底から流れ出るくらい与えます。
- 肥料……窒素成分が不足すると生育は悪くなり下葉が黄変します。一方、多す ぎると軟弱となり葉が大きくなりすぎるので、月に2回ほど液肥を与えます。

### 〈病害虫〉

葉に褐色のややくぼんだ斑点が出るのは褐斑病で、小斑点から同心円斑に拡大 するのが輪紋病です。どちらもマンネプダイセンかオーソサイドで予防します。

育苗中および開花の前後のころにアブラムシがよくつきますが、ダイジストン かオルトラン粒剤を鉢内にひとつまみ入れれば、約1ヶ月間防除できます。



# リーガースベゴニア

- ●シュウカイドウ科
- ●非耐寒性多年草
- ●開花期 秋~春

### 〈性 質〉

リーガースベコニアはエラチオールとも呼ばれ、最近話題の系統で、西ドイツのオット・リーガーの作出です。エラチオールの特徴は葉が厚く、葉の先が鋭角的であり、球根ベコニアに草姿が似ているが、花もちがよく多花性です。

### 〈購入上の注意〉

ハナベコニアの類では、葉辺から枯れ込みの入っているものはつぎつぎと枯れることが多いから、まず除外し、茎部の病徴のない咲きはじめの株の多いものを選びます。管理しだいでかなり咲き続けるものですから、健全なものを第一とします。

### 〈管理〉

戸外、室内を問わず、日当りのよい所で育てます。

- 温度……冬季は5℃以上に保温した方が安全です。夏の高温時には50%程度の しゃ光をして、涼しくします。
- 水……鉢の表面が白っぽくかわいたら水を与えますが、冬はさらに2~3日 してから与えます。与える時は鉢底の穴から流れるくらいたっぷりと与えます。
- 肥料……培養土は有機質に富んだ多孔質のものがよく、水はけが悪く鉢土が過 湿になると下葉が落ちるので注意します。

生育中の株には、2週間に1回くらいハイポネックス等の液肥を稀釈法の2倍 くらいにして与えます。

• 植え替え……田土と腐棄土を半々くらいに混ぜた用土に植え替えますが、リーガースベコニアは他のベコニア類よりも酸性を好むので、pHを4.5~6.5の範囲とします。

## 〈繁殖〉

葉ざし、葉芽ざしともさし床を20℃前後に保温し、換気に注意して行ないます。



# ガーベラ

- ●キク科
- 非耐寒性宿根草
- ●開花期 5~11月

#### 〈性 質〉

南アフリカの原産でキク科に属し、長く伸びた花茎につややかな色彩の花を春から秋まで開花しつづけます。わが国のセンボンヤリの仲間であり、和名はオオセンボンヤリ、ハナグルマなどとつけられています。

### 〈購入上の注意〉

葉は濃緑で厚くしまっており、花茎は太くて短いものの中から、花を確かめて 選びます。

### 〈管理〉

原産地の気候は冬暖かく、日照と降雨に恵まれ、夏はあまり高温にならない場所なので、これに少しでも近い場所で栽培します。日照不足になると葉ばかりがたくさん繁って徒長し、花芽がつきません。

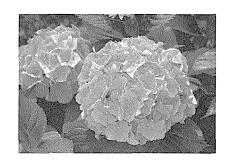
花が終ったものは花がら摘みを行ないます。花茎を持って左右に振るように引っぱると抜けます。

- 温度……20~25℃を生育適温としますが、比較的寒さに強く、地上部は枯れて も休眠して越冬します。
- 水……土に湿りけが多いと、根が腐るので、水やりはやや控えめに行ないます。
- •肥料……緩効性の大粒の化成肥料で、リン酸、カリ分の多いものを2ヶ月に1回、5~6粒与えます。
- 植え替え……用土は赤玉土に堆肥か腐葉土を3割ほど混ぜ、カリ分の多い緩効 性化成肥料をひとつまみ基肥として入れて植えます。

ガーベラは中性に近い土壌を好み、酸性土壌では葉がちぢれたり、黄色や紫色に変色して生気がなくなり育ちません。このため土壌酸度を6.0~7.0に調整する必要があります。

### 〈病害虫〉

高温乾燥期にハダニが発生するので、殺ダニ剤(ケルセン、モレスタン、エイカロールなど)を散布します。



# ハイドランジア

- ●西洋アジサイ
- ●ユキノシタ科
- ●落葉低木
- ●開花期 5~7月

### 〈性質〉

鉢物として最近人気を呼んでいるハイドランジァーは、アジサイがヨーロッパで改良されて、再び日本へ導入されたものです。花色は鮮明で、美しく、青、赤、白等があります。

### 〈管理〉

葉が大きく蒸散作用が盛んなので、かん水を十分行います。真夏の強光線をさけて、日陰に置くか、寒冷砂をかけます。

摘芯は7月中旬までに行います。摘芯が遅れると、秋に花芽が形成されません。早すぎると枝側が伸びすぎて鉢物としての草姿が乱れます。摘芯後、2~3cm伸びた時B-ナインの300倍液を葉面散布して茎の伸長をおさえます。

肥料はかん水量が多く成分が流亡しやすいので、多めに施します。

土壌条件により花色が変化しやすく、青色系の品種は土壌が酸性(PH5)の時に美しい青色となり、赤桃系品種は中性からアルカリ性の土壌で良い色となります。 真夏以外、特に花芽のできる9月から10月は、必ず日当りの良い所に置きます。 また通風にも気をつけます。

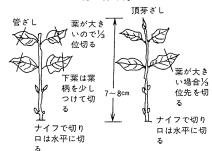
病気はウドンコ病(モレスタン、トップジンM等)、害虫はアブラムシ(エカチ

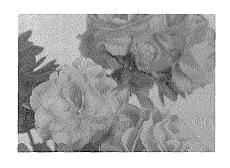
ンTD、スミチオン等の散布)ハマキガ、コガネムシ(カルホスの散布)ハダニ(プリクトラン、モレスタン、ケルセン等の散布)が発生しやすいものです。害虫の予防剤としてオルトラン粒剤の施用も効果があります。

#### 〈繁殖〉

6月頃さし木を行います。さし木 には頂芽ざしと管ざしがあって、(図 参照)用土は赤玉土、鹿沼土、バー ミキュライト等とします。

### さし穂の作り方





# アザレア

- ●西洋ツツジ
- ●ツツジ科
- ●常緑低木
- ●開花期 12~5月

### 〈性 質〉

初春の鉢花として、年末から初春にかけて店頭にでまわっています。ツツジや サツキと同じ仲間で、中国原産のツツジがヨーロッパへ渡り、ほかの種類と交配 改良された園芸種です。系統はベルギー系とアメリカ系があります。

大部分の品種は、日のあたる場所におきますが冬季間は室内に入れます。

### 〈管理〉

肥料は苗養成中は油粕の置き肥を $1 \sim 2$  ヶ月に1 回の割で施します。油粕の代わりに粒状化成肥料を施します。仕上げ鉢への鉢あげは5 月に行い元肥を施し、7 月油粕を追肥します。

摘心は軽く行い新梢の発生をそろえます。この時アトリナール60倍液で処理を すれば、発生する芽数が増加し、株張りも良くなります。

また、わい化と花芽分化促進のためB-ナインの250倍液を2回散布します。 1回目は新梢が3cm生長した時、2回目は1回目の処理後 $2\sim3$ 週間後に行います。この2回の処理により新梢をコンパクトにします。

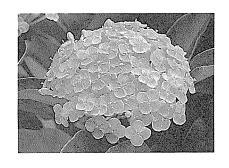
花芽は休眠し、その後低温にあい休眠が破れて開花します。また低温のかわりに、ジベレリン400 P P m を株全体に噴霧してもよく、この処理は早くても 9 月上旬以降に行います。開花促進のためには、低温処理(株冷蔵)を行うか、上記のようにジベレリン処理を行います。

害虫はグンバイムシ(スミチオン剤等散布)やハダニ(モレスタン等散布)が発生 します。

## 〈繁殖〉

さし木で行います。時期は5月~6月が、本年伸びた枝の先を5~7cmに切って鹿沼土にさします。

苗養成の用土は鹿沼土とミズゴケをこまかくしたもの(またはピートモス)を同量まぜたものを使います。仕上げ用土は鹿沼土3、ピートモス1の割合とします。



# サンタンカ

- ●イクソラ
- ●アカネ科
- ●非耐寒性常緑低木
- ●開花期 5~8月

### 〈性質〉

熱帯産の小型花木で、樹高が低く、その頂部にオオデマリに似た花が咲きます。 花色は朱赤色、橙赤色が多く、黄色、白色もあって、鉢花として親しまれていま す。栽培環境は、夏の間は明るい日陰におき、秋から春にかけては、十分に日光 にあてます。生育適温は18~22℃です。

### 〈管理〉

越冬は5 $^{\circ}$ 以上が必要で、 $^{\circ}$ 10 $^{\circ}$ 以上を保つことができれば、落葉しません。 鉢土は田土または畑土3、腐葉土2、川砂1の配合土が適します。

肥料は基肥として、緩効性のマグアンプKやハイコントロール等を施し、追肥として、液肥か I B粒状化成肥料を 5 月~10月頃まで月 1 回の割に施します。

鉢土は常に少し湿り気味の方がよく、一度過乾燥にすると根いたみが激しく回 復が困難です。

秋に入り低温となるにしたがって、かん水を、次第に控え目にします。

また秋の低温にあうことによって花芽分化が順調に行われると言われていますがサンタンカの花芽分化期は10月下旬頃で、これが確実に行われるには、側枝が4節以上に伸びた株が、約40日間10~15℃にあうことです。

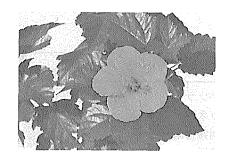
病気はあまり発生しませんが、害虫ではカイガラムシ(冬季から早春に竹べらなどでカイガラをかき落し、幼虫発生期の6~7月にスプラサイドを10日おきに

数回散布)、ハダニ(モレスタン、エイカロール等殺 ダニ剤を交互散布する)アブラムシ(鉢土にオルトラ ンを少量まく)がつくのでカッコ内のような処置を します。

## 〈繁殖〉

繁殖は6月頃、枝の先端を $5\sim10$ cmの長さに切り、それぞれの葉を半分程切りつめ、水あげを十分してから、鹿沼土か川砂にさし木します。その後、1ヶ月位は日陰状態で湿度を高くして管理します。発根は1ヶ月位です。(図参照)





# ハイビスカス

- ●ブッソウゲ
- ●アオイ科
- 非耐寒性常緑低木
- ●開花期 6~9月

### 〈性 質〉

ハイビスカスは、フヨウやムクゲと同じ仲間で、ハワイや沖縄で親しまれています。花色は紅、桃、橙、黄、白等があり、花の咲き方も一重、半八重、八重等があります。品種も多くありますが、大別すると、在来系(沖縄の民家等にある赤い花)、ヨーロッパ系(オランダ、ベルギー等で栽培され樹高は低くよく分枝し、花色は赤、黄、橙等)ハワイ系(花は大きく、色も華やかで、市販のもは大部分がこの系統です。)があります。

### 〈管理〉

日照と温度さえあれば、年中花をつける熱帯花木で、日陰では徒長して、花は咲きません。冬季越冬させるだけならば 5  $\mathbb{C}$ 以上で、花を咲かせるには $15\mathbb{C}$ 以上が必要です。

鉢土は、田土か赤玉土7に、腐葉土3、の割合とします。生育期間中4回ほど油粕と骨粉を置き肥えとして与えます。

矮化剤としてのCCCは1000倍液で新芽が5cm位伸びた頃葉に散布します。また徒長防止、葉色を良くするため、2回目は800倍液を散布します。スリートンは1鉢当り1CCを潅注すると効果的です。

害虫は新芽が伸びる頃発生するアブラムシにはエカチン、スミチオン散布、夏 に発生するハダニにはケルセン、モレスタン等を散布して対応します。

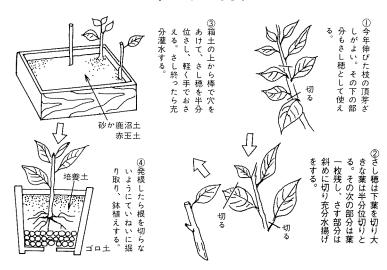
生長が旺盛なので鉢では根づまりを起こすので、ひと回り大きな鉢に植えかえるか、5月頃から日当りと土壌の良い場所へ植え込み、10月には枝を半分位に刈り込み鉢あげして室内に入れます。

## 〈繁 殖〉

さし木を行います。枝を10cm位の長さに切り、葉をそれぞれ約半分に切り除いたさし穂を川砂、鹿沼土、バーミキュライトに、十分水あげをして発根ホルモンをつけてさしつけます。(図参照)

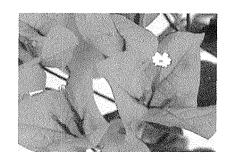
時期は、初夏、秋で20℃以上の温度が必要です。

#### ハイビスカスのさし木



## ☆ 花の格言・名言より

- ◇青は藍より出でて藍より青し=弟子が先生よりすぐれ、子が父にまさることをいう。
- ◇朝顔の花一時=栄えている期間の短いことをいう。
- ◇桜に百年の樹少なく、松に千年の緑多し=華やかな花を咲かせるサクラの木が、マッよりも寿命が短かいように、人の世も、繁栄を極める家は数代と続かず、質朴を守る家は子々孫々長く続くものである。
- ◇桜は三月・菖蒲は五月=ものにはいちばんよい時期があるということ。
- ◇手にとるな、やはり野におけれんげ草=野の花は野に咲いていてこそ美しく見える のであって、人にもそれぞれ、その人にふさわしい場所がある。
- ◇十日の菊、六日の菖蒲=菊は9月9日の重陽の節供に、菖蒲は5月5日の端午の節供に供えるべきもの、十日や六日では一日遅い。物ごとが間に合わないことのたとえ。



# ブーゲンビレア

- オシロイバナ科
- ●非耐寒性半つる性植物
- ●開花期 5月~9月

### 〈性 質〉

ハイビスカスとともに良く知られている熱帯花木です。一般に花といわれている部分は苞で、花は苞の内側にあります。色は濃桃色が知られており、他に赤、白、橙色があります。また一重咲と八重咲があります。

開花は日光と温度に影響され、、一般に一定の大きさに達した株が気温15℃以上で十分な日照のものとでよく開花します。

### 〈管 理〉

生育適温は25℃くらいで、越冬には3℃以上が必要です。低温期は潅水を控えます。

用土は肥えた土が良く、赤玉土5、腐葉土3、川砂2とし、クロロシスが発生 しないよう、やや酸性にします。

仕立て方は柱状仕立てにするのが一般的です。開花をそろえるため、開花3カ月前から1カ月間くらい(摘心後新芽が伸び始めた頃より)かん水を控えると着花数が増し、そろって開花します。

肥料は鉢あげや鉢がえの時基肥を施しますが、春から夏の生育期間中は、油粕の置き肥えを3回位施します。

害虫はアブラムシが新梢と花に発生するので、エカチン、スミチオン等を散布 します。

室内で花が落ちやすいのは光線の不足です。とくに、一重咲の系統は環境が急変すると花梗の部分に離層ができやすく一時に落花します。落花を防ぐため、2.4 D 4 万倍液か、αーナフタレン錠20PPMを花に散布するとある程度効果があります。

## 〈繁殖〉

さし木で行います。 $5\sim6$  月に若い緑枝より、やや褐色になった充実した枝を $8\sim10$ cmに切りさし穂とします。発根ホルモンを溶かした水で $3\sim4$  時間水あげし、鹿沼土、赤玉土、バーミキュライト等にさします。





シクラメン

クジャクサボテン



ゼラニューム



ハイドランジァ





デンドロビウム

ポインセチア



リーガスベコニア



グロキシニア





パフィオペディルム

カトレア



ミズバショウ



タヌキモ



スイレン



ハス

# 6.新しい花



## スパシフィルム

- ●サトイモ科
- ●中南米コロンビア原産
- ●開花期 4~9月

### 〈性 質〉

近年人気が高まっており、5月から10月まで園芸店で多くみかけます。花名は 属名です。

葉は濃緑色で、葉だけでも鑑賞できますが、白い花は花弁でなく苞です。ミズバショウやカラーと似ており、手入れがやさしく花の長もちする春植えの常緑多年草です。

## 〈栽 培〉

日陰が好きな植物と思われがちですが、(耐陰性が強いので)本来は好日性で、 薄日が長くあたる環境を好みます。しかし直射日光を嫌います。

急激な温度変化は絶対にさけ、冬でも10℃位の温度を保ちます。根張りが良い ので年1回の植えかえが必要で、時期は5月から7月に行い株分けもします。

用土は水苔、腐葉土、ピートモスの混合か、赤玉 6、腐葉土 3、パーライト 1 の混合したものでよく、肥料は緩効性の化成肥料を基肥とし、液体肥料(リン酸分の多いもの)を追肥として春から秋へかけて调 1 回施します

かん水は十分行います。特に気温の高くなる時期はたっぷり与えます。



## へ ー べ

- ●ゴマノハグサ科
- ●ニュージランド原産
- 開花期 4~6月

### 〈性 質〉

昭和40年代にニュージュランドから日本へ導入された。ヘーベは属名で、ニュージュランドには、この仲間が100種以上あるといわれています。

常緑性の低木で、春から初夏にかけて開花します。用途は、鉢花が主体ですが 切り花の利用もあります。

主な種類として、グリーンフラッシュ(葉は光沢のある濃緑色で、花は純白)と、エクラタンテ(花は濃桃色)ミッド・サマービューティ(紫色)などがあります。

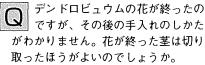
### 〈栽 培〉

さし木で簡単に殖やせます。時期は5月~6月に行います。仕立は小苗時に摘 芯して、わき枝を出しコンパクトな樹形とします。日当りの良い場所を好みます が、夏は日除けが必要です。寒さには強く、秋から冬へかけて低温にあわすこと も必要です。

鉢は育苗時3~4号鉢、仕上げ時は5~6号鉢を用い排水のよい用土を使います。肥料は緩効性の化成肥料を与えます。

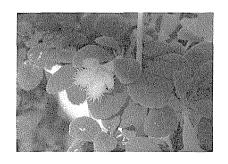
# Q&A

## 花づくりこんなときどうする?



A デンドロビュウムには、ノビル系 のものとファレノプシス系のもの があり、それぞれ性質が異なっていま す。 ファレノプシス系のデンドロビュウムは、一度花が咲いた茎のさらに上部の節位から、その後2~3年にわたり、新しい花茎を伸ばしてきます。そして次々と花を楽しむことができるわけですから、古い茎は切りすてずに育てます。

ノビル系のデンドロビュウムは、一



# アルソビア・ディアンティフローラ

- ●イワタバコ科
- ●中米原産
- ●開花期 5~10月

### 〈性 質〉

イワタバコ科の仲間にエスピシアという属があり、このエスピシアはメキシコ南部から中米、ブラジルにかけて広く自生しており、現在約9種が確認されています。最近になって、このエスピシア属の見直しが行われ、ディアンティフローラと他1種が新しい属、アルソビアに移りました。

このアルソビア属はメキシコから中米にかけて分布しており、森林に生育し、ランナーを伸ばし、その先端に子株を生じて、樹上に着生する植物です。アルソビア・ディアンティフローラの葉は小さくて丸い緑色で、脈部は暗赤色を帯び、花は白色で先は細かく切れ込んでいて、優雅で美しい。

### 〈栽 培〉

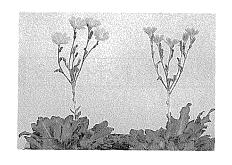
エスピシアは寒さに弱く最低15℃が必要でしたが、このアルソビアはかなり低温に耐え、冬期室内で育てれば十分越冬します。高温に強い植物なので、真夏でも盛んに生育し、かわいい花を次々と咲かせてくれます。夏場は戸外の半日陰下で栽培するとよく生育しますが、一年中室内で栽培するのもよい。つり鉢栽培がいちばん適しています。

### 〈繁 殖〉

ランナーに生じた子株を切り取って、さし木で殖します。発根する場所は節部からなので、節部は必ずさし木用土の中に埋め込みます。さし木の時期は、秋に行い、すっきりとした姿で越冬させます。

般的に一度花が咲いた茎からは花が咲きません。しかし、茎の下の方にだけ花が咲いて上部に咲かなかった場合は、次の年に花が咲く可能性がありますので、茎を切り取ってはいけません。また、花の咲かなくなった古い茎は、新芽を伸ばすための栄養補給源という大切な役割をもっているので、2~3年

は切らずに残しておくようにします。 なお、ノビル系のデンドロビュウム の花付きをよくするためには、できる だけ日光によく当て、8月~9月にか けてリン酸分の肥料を少し与えます。 そして秋の気温が低下してきた頃には、 十分低温に当ててやるのが花芽分化を 起させる条件です。



# レウイシア

- ●スベリヒユ科
- ●北米原産
- ●開花期 4~5月

### 〈性 質〉

レウイシアは大正時代に日本に導入されたが、日本的な花でなかったためか、 あまり人気が出ず、今日まで最小限の栽培しかされていなかった。ところが最近 になって山野草として扱われるようになり、ようやく花の可愛らしさと珍しさで 人気急上昇中です。

このレウイシアは、北アメリカ西部に約16種類が自生しており、欧米では山草 愛好家がよく栽培している。比較的日本でよく栽培されているものは、コチレドン、ネバデンシス、レディビバの3種類ですが、コチレドンの中に変種で鋸歯のようになったヘックネリや、葉の幅が狭くて波打っているハウエリーがあります。

### 〈栽 培〉

夏の高温には強く、日当りを好み、暑さに強い山野草の一つと言われていますが、多湿には弱くて、排水が悪ければたちまち根腐れを起こします。鉢植え栽培のコンポストは排水のよい軽石や日向土がよいでしょう。

肥料は液肥で与えたほうが無難で、 $1_{r}$ 月に1回程度ハイポネックスの1000~ 2000 倍液を与えます。

### 〈繁 殖〉

実生、株分け、さし木で殖せます。新しい種をまくとすぐ発芽するので、種を取ったら保存しないで、その日のうちに種まきします。

# 7. 水 辺 の 花



# ミズバショウ

- ●サトイモ科
- ●宿根草
- ●開花期 3~5月

### 〈性 質〉

本州(兵庫県以北の日本海側)、北海道、カムチャッカに分布し、湿原や水湿林に生えます。北方では草原の中に純群落を造ることもありますが、南限地の兵庫、福井、岐阜、富山などではアシなどの丈の高い草と混生して夏には日陰になります。水を好みますが、流水であって停滞水では育ちません。花は雪解けに始まり、成葉3枚につき1個の仏炎苞があって、葉の展開に従い順次咲き進んでゆきます。仏炎苞が茶色に枯れてから約2カ月で果実が実り、緑色のままで悪臭を放ちながら崩れて種子を放出し始めます。種子はゼリー状のもので包まれていて水に浮き、新たな場所に水の流れによって運ばれていきます。

### 〈栽 培〉

根が深く、生えているものを掘り取ることは不可能です。このため、種子から育てるか、小苗を譲り受けるしか入手方法はありません。播種床は赤玉土の米粒大7にバーミキュライト3を混ぜて浅鉢に入れたものとし、深さ2~3 cmの腰水をして毎日水を替えながら管理します。採り播きの場合は15~30日で発芽が始まります。ちょうど梅雨明けとなりますので、半日陰の涼しい場所で管理し、ハイポネックス2,000倍液を週1回潅水代りに与えます。秋には植え替えて、赤玉土の米粒大7にバーク堆肥3を混ぜたものを5号浅鉢に入れ、3 cm間隔に植え付けます(30株/鉢程度)。2年目は5 cm間隔に植え拡げ(8~9 cmポリボットに1本植え)、3 年目は4~5号浅鉢に1株植えとし、順調であれば4年目の春に花が見られます。2年目の鉢上げ以後は魚肥を主体とし、春の展葉期、梅雨時、旧盆明け、9月下旬の4回、煮干しを3本/株ずつ土にさし込みます。病害虫はこれといってありませんが、葉焼けさせること、水を腐らせることが大敵なので、鉢の置き場所に気を付けて腰水をしていながらも水は毎日替えることが肝心です。地植えする場合は3年苗を用いて流水のある水湿地に植え込みます。



# スイレン

- ●スイレン科
- ●宿根草
- ●開花期 6~9月

### 〈種 類〉

本来「睡蓮」の名は東アジア〜ヨーロッパ、北インドに野生するヒツジグサ(未草、花は白色で未の刻・午後2時頃に花が開くことから付いた名。)に充てていたものでしたが、明治時代にフランスのマルリアクが改良した一連の品種が導入され、栽培が楽で花数が多く大輪で朝から夕まで開いている鑑賞価値の高いこれらの改良種に名を奪われてしまいました。園芸品種は野外で越冬ができる耐寒性スイレンと、冬季に保護して水温を15℃以上に保つ熱帯性スイレンとに大別できます。一般によく栽培されるものは耐寒性スイレンで、赤花の「アトラクション」、桃花の「ロゼア」、白色の「アルバ」、黄花の「サンライズ」などが代表的です。

### 〈栽 培〉

生育期間 (水温が 5  $\circ$   $\circ$  以上となる期間) が150日以上あればどこでも育ちます。まず、池や水槽など植える場所を準備し、 $7\sim10$ 号鉢に 1 株ずつ田土で植え込み、水深を $10\sim30$ cmにして管理します。肥料は煮干し、身欠きニシンなどの魚肥がよく、春 4 月に水がぬるんだなら $10\sim20$  g /株を土中に差し込んでやります。水中には金魚やメダカなどを飼えばボウフラや害虫などを食べてくれます。水替えをできるだけ多くしますと、花数が多くなります。

## 〈近縁種〉

コウホネ(河骨、川骨)は日本、朝鮮に分布し、池や沼などに生えます。花は黄色(末期に朱色となる)で、5 弁、径 4~5 cm、6~9 月咲です。水深10~80 cmと適応幅が広く、深水ならばどこでも育ちます。根茎は太く、色白で動物の骨のようにも見え、浄血、補精(婦人の)薬として用いる和漢薬です。浅水ならば空中に葉は立ち上がりますが、中水ならばスイレンのように葉を水に浮かべ、深水ならば水中葉だけの形態となります。肥料を好みますのでこまめに与えます。



# ハス

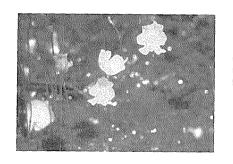
- ●スイレン科
- ●宿根草
- ●開花期 7~9月

### 〈種 類〉

ハスはインド、中国、日本、オーストラリア北部の広い範囲に分布します。大大賀蓮は1951年に大賀一郎博士が千葉県検見川の2,000年前(縄文時代)の泥炭質を育る発見された種子を発芽させたもの、中国古代蓮は中国遼寧省大連市普蘭大の1,000年前の地層から出た種子を発芽させたもので、種子の寿命が極めて長い植物です。種子は栗のような味で美味、中国湖北省武漢市周辺、台湾西部において種子を食用、薬用とする品種が分化しています。地下茎(蓮根)を食用とするための栽培が盛んですが、現在の主力品種の加賀種、備中種ともに明治~大正時代に中国江蘇省、安徽省から蓮根用品種の種子を導入して育成したものです。花を鑑賞する品種は仏僧が中国から種子でもたらしたものが多く、鑑真和上が753年に関する品種は仏僧が中国から種子でもたらしたものが多く、鑑真和上が753年に東朝された際の白君子小草(招提寺青蓮)、道元禅師が1223年に帰朝された際の意識出白(聖人蓮)、即非和尚が1,657年に来朝された際の即非蓮などがあります。参考された経は、2000年に発達しておれた際の道法のようないます。を変えれた際の白港大小草(招提寺青蓮)、道元禅師が1223年に帰朝された際の意味は、2000年に帰朝された際の意味は、2000年に帰朝された際の遊り道、2000年に帰朝された際の意味は、2000年に発動された際のが選ば、2000年に帰朝された際の意味は、2000年に発動された際のが選ば、2000年に帰朝された際の意味は、2000年に発動された際の地・2000年に発動された際の意味は、2000年に表現された際の意味は、2000年に表現された際の地・2000年に表現された。2000年に表現された。2000年に表現された際が、2000年に表現された際の地・2000年に表現された際の地・2000年に表現された。2000年に表現された際の地・2000年に表現された際の地・2000年に表現された際の地・2000年に表現された際の地・2000年に表現された際の地・2000年に表現された際の地・2000年に表現された際の地・2000年に表現された際の地・2000年に表現された際の地・2000年に表現された。2000年に表現された際の地・2000年に表現された際の地・2000年に表現された際の地・2000年に表現された際の地・2000年に表現された際の地・2000年に表現された際の地・2000年に表現された際の地・2000年に表現された際の地・2000年に表現された際の地・2000年に表現された際の地・2000年に表現された際の地・2000年に表現された際の地・2000年に表現された際の地・2000年に表現された際のは、2000年に表現された際のは、2000年に表現された際のは、2000年に表現された際のは、2000年に表現された際のは、2000年に表現された際のは、2000年に表現された際のは、2000年に表現された際のは、2000年に表現されためのは、2000年に表現されためのは、2000年に表現されためのは、2000年に表現されためのは、2000年に表現されためのは、2000年に表現されためのは、2000年に表現されためのは、2000年に表現されためのは、2000年に表現されためのは、2000年に表現されためのは、2000年に表現されためのは、2000年に表現されためのは、2000年に表現されためのは、2000年に表現を表現されためのは、2000年に表現が、2000年に表現が、2000年に表現されためのは、2000年に表現

## 〈裁 培〉

地植えの場合は水田に植え付けます。3~4月に稲と同様に荒起し、代かきをした後、芽先の2~3節を母株とし、石灰乳50倍液に30分程浸漬して消毒した後、芽の向きを揃えて80cm間隔に植え、次列は3m離れて植え出していきます。鉢植えの用土は田土を用い、矮性の茶椀蓮系の品種なら径30cm深さ20~30cm、中形の載蓮などならば径50cm深さ40cmの容器(鉢、洗面器、タライなど)に植え付けます。肥料は魚肥がよく、煮干し、身欠きニシンなどを4月と5月の2回、各々50~70g/株施用します。お盆の切花で仏花に用います。花や葉は水上げが悪いので「水上げポンプ」で水を圧入してやりますが、この時STS 剤などの延命剤を用いるとさらに花保ちがよくなります。



# タヌキモ

- ●タヌキモ科
- ●宿根草
- ●開花期 7~9月

### 〈性質〉

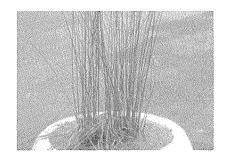
北半球の温帯の湿原、沼沢などに広く分布します。根がない浮遊性の水草で、茎は分枝して長さ50cmにまでなり、多数の捕虫葉を付けてミジンコなどの動物性プランクトンや水生昆虫の幼生などを捕えて窒素源とします。花は黄色、水上に総状花序を立てて数個の小花を付けます。水質は弱酸性で、よく澄んで底まで光が透って明るいこと、いつも新しい水の供給があって水温が一定なことなどが生育の条件です。

### 〈栽 培〉

径40cm、深さ30cm以上の容器(水蓮鉢、金魚鉢、タライなど)に水を入れた後、長さ10cmに切った稲ワラまたは麦ワラを浸して沈めます。数日を経てワラのアクが出て水が茶色っぽくなれば栽培によい水質となったので母株を入れます。水は毎朝新しいものを注ぎ入れて全体量の2割以上を更新します。この際に蓮口を用いていますと水滴が水面を走り廻ることをもって良好な水質であると判断します。水質が悪化して水を注ぐとアワが立つようになるとアオミドロやアオコなどの緑藻が生え始めます。これらの雑藻が生えたならすぐに鉄明礬を入れ、稲ワラを補給し、水質を保ちます。稲ワラ、麦ワラがなければエノコログサ、ヒエなどイネ科(カヤツリグサ科はダメ!)の茎葉であれば何でもよいので、生のまま短かく切って入れます。アオミドロの発生量が多いならハシなどを用いてからめ取るとよいでしょう。肥料は稲ワラの補供だけでよく、他は施してはなりません。施用時期は、早春、梅雨、盆過ぎ、秋の4回を目安とし、株の状態や水質がおかしいならいつでも施します。浮遊性の水草なので移植は新しい容器に水を入れて水質を整えて株を入れるだけでよく、いつでもできます。

## 〈種 類〉

普通のタヌキモのほか、イヌタヌキモ、シャクジイタヌキモ、コタヌキモ、ヤチタヌキモ、フサタヌキモ、ヒメタヌキモ、ミカワタヌキモ、など多数の種があります。花色は全て黄色ですが花形、草姿はずいぶんと違います。



# フトイ

- ●カヤツリグサ科
- ●宿根草
- ●鑑賞期 5~10月

### 〈性 質〉

アジア〜ヨーロッパの温帯域の池沼などに広く分布する水草で、根茎は太く横走して伸び拡がって浅水域を埋める程になります。茎の断面は円形で高さは $1 \sim 2 \,\mathrm{m}$ 、葉は退化してなく、茎が葉の代りをしています。茎の断面は丸く、先端に小穂が付き、果実は $7 \sim 10$ 月に熟します。昔、茎を刈り取ってイグサやアンペラのような敷き物を作っていました。

### 〈栽 培〉

水草なので水切れは禁物です。湿地に生える場合の地下水位は $5\,\mathrm{cm}$ より浅く、水中に生える場合は水深 $10\,\mathrm{cm}$ よりも根茎を沈めないようにして、一定の量の水と空気を確保しているようです。日照不足では葉色が悪くなりまた病気が出易くなります。鉢植え用土は赤玉土の米粒大を用い、茎 $3\sim5\,\mathrm{arg}$ での株で $3\,\mathrm{s}$ 号鉢、 $10\sim15\,\mathrm{arg}$ での株で $5\,\mathrm{s}$ 号平鉢に植え、深めの鉢皿を用いて $2\sim3\,\mathrm{cm}$ の腰水をしながら育てます。地植えの場合は、水田状態として水をあてて育てます。植え付け密度は $3\sim5\,\mathrm{arg}$ での株を用いて縦横ともに $20\,\mathrm{cm}$ 間隔とします。肥料は油類と骨粉をねり合わせたものを用い、 $4\,\mathrm{fl}$ と9 $\,\mathrm{fl}$ の $2\,\mathrm{fl}$ 回、 $3\,\mathrm{s}$ 号鉢なら $5\,\mathrm{g}$ ( $2\,\mathrm{cm}$ 角を $1\,\mathrm{fl}$ 個)、 $5\,\mathrm{s}$ 号鉢なら $15\,\mathrm{g}$ (同 $3\,\mathrm{fl}$ 個)、地植えなら $100\,\mathrm{g}$ /㎡程を施用します。株分け移植はいつでもできます。古茎は黄色くなったら刈り取り、なるべく新しい茎を出させるようにします。 $7\,\mathrm{fl}$ と9 $\,\mathrm{fl}$ に切花葉物としての需用期があるので、全面刈り取りをして良品のみを出荷するという方法が生産地では行なわれているようです。古株は茎上がりが悪いので、 $2\sim3\,\mathrm{fl}$ に度植えかえをします。病害虫はメイチュウの被害があるので、定期的に防除します。

### 〈近縁類〉

サンカクイ(三角藺)は、フトイによく似ていますが、茎の断面は三角形で高さ50~100cmとやや小さく、池や川のほとりにあって水中にまで侵出しない点で違います。古名をシリクサ(知草、尻草)と言い、昔敷物を織りました。

## **● 押し花で楽しむ四季の花 ●**

時が過ぎれば枯れてしまう花を、美しいままに残しておくのが押し花です。

1. 採取は花が咲ききる前に

花の採取は咲始めがよい。できたら午前10時頃までがよいとされています。遠方に出かけて花を採取し、持ち帰って押し花にするような場合は、花を入れたポリ袋の中に、ティッシュペーパーを3cmぐらいに丸めて、オキシフルをたっぷりしみ込ませ、これを一緒に入れて密閉しておけば、24時間はしおれさせないで保つことができます。

2. 用意するもの

厚紙、新聞紙、乾燥剤(ゼオドライ)、半紙(和紙)、重し、はさみ、ピンセット、 カッターナイフ

- 3. 押し花の手順
  - 1) 厚紙の上に新聞紙を二つに折って敷き、その半分の上に新聞の文字が見えなくなるくらいに乾燥剤をのせ、平らにならす。
  - 2) その上に二つ折りした半紙をのせ、花を置く。大きな葉や、混み入った花は茎からはずして、半紙を閉じ、上に乾燥剤を平らにのせる。
  - 3) 花をはさんだ半紙と乾燥剤を繰返し3~4回重ねてもよい。新聞紙を閉じ、も う一枚の厚紙をのせる。
  - 4) ポリ袋に入れ、口を閉じ、重しをのせる。  $6 \sim 7$ 日ででき上るが、その間は置き場所を動かさない。
- 4. きれいにつくるためのポイント
  - 1) 草花は水揚げのよい状態で、水けをよくふきとってから押し花にします。
  - 2) 茎や葉が多すぎて、プレスしたとき重なりそうな場合は、切り捨てたり、切り離して別々にプレスします。
  - 3) 花は八分咲き、五分咲き、つぼみなど、いろいろの形のものをプレスしておくと、デザインするとき楽しめます。
  - 4) 多種類の草花を一緒に並べる場合は、厚さが平均になるよう注意します。
  - 5) ビニールシート(ポリ袋)は、光を通さない色つきのものを使います。